

テロ及びパウロに追潮せられたり。

ポリカルプ羅馬に到るや監督アニセタスは彼ポリカルプが人格に相當せる敬禮を以て之を迎へたり。此の老尊監督は羅馬の異教的暴徒の手に犠牲として要められし時、其朋友の勧めに由りて先づ其の近隣の一村に退き、更にまた後の他の村に移れり、而して其の第二の退去處に於て見あらはさるゝや、泰然自若として曰く、「主の旨成れかし」と。彼其の追捕者の到るを聞くや、二階より降り來りて彼等を迎へ、飲食の物を彼等の前に供へしめて、暫く祈禱するの時間を與へんことを之に請へり。彼等はポリカルプの尊嚴なる儀容と、自若たる舉止に太く打驚き、二時間祈禱をつゞくることを許したり。其の祈禱の中にポリカルプは其の大小貧富の朋友のため、及び世界中の一般の教會の爲に悉く代りて祈れり。斯くて其の出發の期に至るや、彼は驢馬に乗せられて市府に携へられたり。彼場内に入るや、衆人の呼號天地を震はせり、而してポリカ

ルプは天より聲ありて、「ポリカルプ強かれ、丈夫たれ」と云へるを耳にせりと云ふ。否然のみならず、其の兄弟も多く之れを聞けりと云ふ。代官はポリカルプに勸むるに其の信仰を棄て、生命を全うせんことを以てせり。然れども彼は應せずして答へて曰く、「八十四年間、我は基督に事へたり、而して基督は我に何の害をもなしたまはず、然るを争でか我今我が主及び我が救主を誦すべけんく。」代官曰く、「此に猛獸あり、汝若し悔改めずんば、我汝を之に投げ與へん。」答へて曰く、「然せよ、請ふ猛獸を呼べ、善より惡に悔改むるは感化に非ず、然れども惡きより正しきに化するは善し。」代官曰く、「汝若し猛獸を懼れずば、我汝を火にて焚殺すべし。」ポリカルプ曰く、「汝は火を以て我を感す、然れども其の火は只暫く燃え消ゆるのみ、汝は審判の火及び永刑の火あるを知らず、是れ即ち惡人のために蓄へられある所の火なり。」

第七章

地下の證蹟土中聲あり

隨墳の存在と其の墓誌銘等

按ずるに猶太民族は古來天下を家として到る處に繁殖すべき運命を有してありしと見ゆ創世紀を窺ふに其の然る所以は特記せられて人皆これを知れり即ち天帝は該民族の始祖アブラハムに默啓して宣はく「汝の子孫は斯の天空の星の數限りなきが如く又濱の眞砂の算へきれざるが如く殖え増すべし」と此の約束の文字は四五千年前に書かれたりしが今日に至りても依然として其の繁殖力を減せず初めヤコブが僅々四五十名の家族を具して埃及に移住して以來數百年の内に早くも幾百萬の人口を算ふるに至りぬ其の一たび羅馬兵に亡ぼされ次いで土耳其人に逐はれ天下諸國に

亡國の民として流寓しつゝある今日に於ても其の勢力は財界にも又政界にも尙非常に大なるものあり政治界に於けるベコンスフキルド卿は暫く措かんもロスチャイルド男シッフ氏等財界に大手腕を揮ひつゝあり而して天下到る處に小ロスチャイルド小シッフは其の地方的勢力を弄しつゝあるにあらすや彼等が其の増殖せる財力の絶大なるや遂に彼等を驅つて其の舊山河パレスティンを土耳其政府より買収し以て古の預言者が唱へし如く思はるゝ猶太國再興を夢想せしめつゝあり諸國の新聞雜誌此の舉を論評する頗る喧し「眞理」紙上嘗て左の報道をなせるありき

猶太王國再興の計畫

猶太民族は上古埃及に寄寓して盛んに繁殖せしかば埃及政府の猜疑を蒙りて非常なる抑壓を加へられたれども其の人口は却つて愈よ増殖し遂に偉人モーゼの

爲に救はれて、漸く獨立自由の人民となるを得たりき。下つて紀元前六世紀の頃に至りて、彼等は再びバビロン幽囚の厄運に遇へりしが、後赦されて歸るに及び、其の子孫にして、他と混らざる純粹の猶太人少なからざりき。紀元第七十年に當り、羅馬人の爲に攻めらるゝや、國家全く滅亡に歸して、住民世界の各所に散亂するに至れり。然れども尙今日に至るも一種特別の人種として存在するは尤も驚く可き現象ならずや。彼等は到る處に、或は宗教の異なる點よりして、或は人種的特質に他の嫌惡を招くことの多きよりして、斷えず輕侮迫害に逢ふと雖も、之によりて毫も其數を減ずる事なく、今日にありても、殆んど六七

百万人の混血なき同民族を有する所以のもの、抑も又何によりて然るか。世界の歴史上未だ嘗て斯の如き先例はあらざる也。之を呼んで一種の奇跡と云ふも、敢て過言にあらざる可し。

現今に至りて一種の運動は彼等の中になされつゝあり。其が期する所は、再びパレスタインに猶太王國を建設し、從來彼等を虐遇輕視せし諸國民と國家的競争をなさんと欲するにあり。此の計畫や既に數年前米國に於て企圖せられ、シカゴに會して相議したりしが、更に又ハヴァリアの首府ミューニヒに於て大會を開けり。來會するものは世界の各所に散在せる猶太人の代表者にして、數れも十

中の九は必ず成就す可しとの確信を抱きをれり然し彼等とても最初より王國を建つる考にては勿論なく只ブルガリヤの先例に倣ひて土耳其政治の下に一國民たる資格を作り徐々と歩を進むるにあるなるべし。」

猶太人種は既に此の如き民族なるが故に而して又比較的他國民よりも優秀なる唯一神教を奉せしに因りて天下諸國到る處に多大なる注意を惹き往々其の土地の權勢家をしてすら我が宗教に投降せしめたり今教會史を按ずるに先づ「羅馬に於ける猶太人」としては――

使徒時代に羅馬に居りし猶太人の數は凡そ三萬人と推算せらる。彼等は皆希百來音節を以て希臘語を話せり。彼等は吾人の知る所を以て言へば七箇の會堂と三箇の墓地を有てり。其の名號銘誌の如きは、大抵は希臘語にして、稀に拉句語なるものあり。中には又希臘語を拉句文字

にて書き、或は拉句語を希臘文字にて書けるが如き不體裁のものも多かりしと云ふ。彼等は、大抵ポンペイ、カンシナス、アントニ等が擄へ來りて奴隸とせし者の子孫なりき。

猶太人の稀代なる風習及び制度、例へば割禮、安息日を守る事、豚肉を忌む事、偶像(彼等が悪鬼として厭忌せし者)に獻げし肉を食はざる事、如きは、羅馬の歴史家及び譏刺家の驚愕、輕蔑及び嘲笑を買ひ得たり。凡そ異教の人民に聖潔なりし者は猶太人には不潔なりき。彼等は人類の敵と見做されたり。然れども要するに斯の如きは、只皮想の見ならくのみ。猶太人は又其の友を有てり。彼等の克制し難き勤勉及び恒忍、彼等の眞面目、懇懇、忠信、及び慈善、彼等が法律を嚴守する事、彼等が戰爭に於て死を畏れざる事、彼等が眞神に堅く信賴する事、彼等が人類の將來の榮耀を望む事、彼等が禮拜の質素にして清潔なる事、唯一なる全能神聖仁慈の神を信する觀念の高尙深大なる事――是等の諸事は、思慮ある端

嚴なる人々を感せしむること甚だ深かりき。是を以て羅馬にも其の他の地にも猶太教に歸依せし者多かりき。ホレス、ペルシアス、ジョセファス等皆證して云ふ。衆くの羅馬人は安息日に業務を執らず、斷食して祈禱し、燈を點じ、摩西の律法を學び、且つエルサレムの神宮に金錢を寄附せりと。ニロ帝の後、ポピアさへも自ら猶太教に心を寄せ、大にジョセファスを寵遇せり。さればにや、ジョセファスは之を「敬虔なる」婦人と呼べり。最もユダヤ人を惡みしセネカも、此の克服されたる民は其の克服者に法律を與へたり」と言はざるを得ざりしなり。

ユダヤ人は二回、即ちタイピリアス帝とクラウデオ帝との世に、羅馬より逐ひ拂はれしが、復た忽ち歸りたり。

パウロ羅馬に達したる時、諸會堂(猶太教の)の宰者(コフ)を招きて談話會を開き、己の好意と福音の披露をなせり。然れども彼等はパウロの解説に對して狡猾なる返答をなし、基督教につきては「只何處にても此宗旨

の誹らるゝを知る」の外、何も知る所なしと言へり。彼等が最上とせし策略は及ぶだけ之を知らずとするに在りしや明かなり。但し定めたる日に於てパウロに聽かんとて來りし者も甚だ多かり、其の中には信せし者もありしかども、多數は例の如く、パウロの證言を斥けて容れざりき。(使徒行傳二十八章十七—二十九)

『羅馬に於ける基督教』としては

此の一種特別なる人民の中よりして基督教——羅馬の威權も敵するに足らざりし一宗教——に始めて歸向する者此に出で來れり。猶太人は只是れ防禦の軍勢のみ、基督教徒は——蔑視せらるゝ十字架の旗の下にありしかども——克服の軍勢なりき。

羅馬教會の精密なる起源は到底到達し得られざる暗黒の奥に存す。我等はエルサレムの教會及びパウロの創立に係る大抵の教會の起初

を知る。然れども羅馬に始めて福音を宣べし者の何人なるを知らず。基督教は世界を感化せんとの熱心を具へたるものなれば、使徒たちがパレスティナを離れざる中に早くも此の世界の首府に傳はりしならん。例へばアンテヲケの教會はバルナバとパウロが之を十分に組織して鞏固ならしめざりし前に、已にエルサレムよりの移住者及び逃避者等相合して之を創めたりしなり。

案するに福音の第一信報はエルサレムに於て基督教會設立の直ぐ後に、彼のペンテコステの奇蹟の目睹者が羅馬に携へ還りしならん。是れ當日の奇蹟を目撃せる人々の中には、羅馬より來りて居る者、或はユダヤ人及び其の教に入りし人ありしと云へばなり。使徒行傳二章十節、果して然らんには、ペンテコステの説教者なりしペテロは、羅馬教會の設立に間接に與かりしと謂ふも可なり。實に羅馬教會はペテロを以て其の基礎として建設せられたる磐なりと爲す。パウロは其の安否を問

へる羅馬の兄弟の中に於て己よりも前に(即ち紀元後三十七年前に)感化せられし己の親戚に安否を問ふあり。パウロが問安の詞をおくりし羅馬の兄弟中の數人の名は、アピアンウエイ(アピア道)の傍に在る基督教徒の地下墳墓地に於て、リビア皇后、アウグスト帝の第二の伉儷の解放奴隸中に發見せらるる基督教徒たる者、パレスティン、スリア、小亞細亞、希臘等より、或は來訪者として、或は移住者として羅馬に來りしならざる可からず。

前にも既に論及せし小亞細亞の總督プリニといふ者、第二世紀の初に於て羅馬皇帝トレイジャンに上書して基督教徒の處分に關する指令を仰げらるあり。教會史に曰く、――

其の治世の初にトレイジャン帝は詔を發して多人数の相結成する諸會(ギルド或はクラブ等の團結體)を禁遏せり。是れ斯る團結體が國家を危うするの具とならんことを恐れてなりき。此の詔が如何に基督教

徒に向ひて妄用せられ得しかは想像するに餘りあり。是れ基督教徒は絶大なる兄弟會(教會)を結成せるものにして、其の會たるや羅馬帝國の内外に於ける諸國に悉く廣がり、親密なる繋網つなみに由りて相結ばり。其の説の中にも其の行の中にも、共に門外漢には秘密と見えたるが如きもの多かりければなり。

此の際、紀元百十一年の頃、少プリニ當時ビテニア及びポンタスの總督として一書を帝に上つり、其の遭遇せる新事件につきて訓令を請へり。

其の書中に彼は帝に告げて曰く、基督教徒が斯る者として彼の前に曳かれし時には、先づ之に基督教徒なるやと問ひ、彼等若し然りと答ふれば何處までも言ひ張る者をば死刑を以て之を嚇おそしつゝ、尙再三同一の問を繰返し、而して其の中執拗にして之に固着する者を刑殺せりと、斯くの如く彼は基督教の性質は如何なるにもあれ、斯る頑固は則ち彼

等をして有罪ならしむとの理由を以て處置をなせり。

當時羅馬帝國の法律にして基督教を禁遏せるものありしか否やは一疑問なり。但しテルタリアンは言へらくニロ帝の法律は悉く廢弛せられたれども、其中基督教を禁遏せんとせる法律のみは尙依然として行なはれたり。且又當時の記録を按ずるに、公然と福音を信奉するの所爲は法律を以て處罰せらるべきものなりしが如し。

彼の告發を以て己の前に曳かれし人々の夥しかりしが爲めに、プリニは其の處置に惑ひたり。彼は彼等に要むるに、諸神の形像の前に於て、帝の彫像に向ひて香を焼き、或は灌祭を行はんことを以てし、或は基督を誑はんことを以てして、之を試みたり。彼が言ひたる所に依れば、眞に基督教徒たる者は一人も之に應ずるは無かりしと云ふ。或る者は其の信仰を棄てたり、或る者は答へて我等は數年前或は二十年來基督教徒なりしが、既に然ることを止めたりと言へり。斯る人々はプリニの要め

し所に應じたり。但し彼等はまた明言して言へらく、彼等の罪惡——若し罪惡なりとせば——は只是に在り、即ち彼等は或る定日に於て日出前に相會して其の神とせる儉督に向ひて讚美歌を謳ひ、嚴肅なる約束を以て相約して、偷盜或は姦淫を行はば、眞實を言はん、委託せられたる物を決して私せじと誓ひ、然る後皆一餐に與かり食へり。此の中にも亦毫も咎むべきものあること無し。

プリニは今一層其の實情を詳にせんと欲して、女會吏と稱ふる婦人二名を執へしめて之を拷問せしが、別に何をも彼等の口より吐かしむるを得ざりき。只彼は彼等の迷信の如何にも笑ふに堪へたるものにして、彼等が之に固着せることの奇怪千萬なるを感せしめ。

是に於てプリニは先づ其の事を帝に奏聞して其の意見を問はざる可からずと思へり。此の事たるや殊に必要なりき。如何となれば、彼が自ら言へる所に依れば之に關係せる人々の數は莫大にして、老少、貧富男

女を別たざるに因り、又此の迷信たるや管に其の毒を市府(都會)に流せしのみならず、亦村落にも田舎中にも等しく蔓延したるに因りてなり。但し彼は斷言して曰く、然しながら此の害惡は救治し難きものに非ず、已に彼が之を禁遏せんとの策を施せし以來、夫の今まで殆んど打棄てられて顧みる者も無かりし諸々の神宮は再び參拜者を得るに至り、今まで買ふ者の極めて僅かなりし牲畜も再び犠牲の爲めに常に攜へ來らるゝこととなりぬ。

帝の答書は左の如くなりし、自ら進んで基督教徒を探す可からず。彼等に對する無名の訴告は受理す可からず。彼等若し告發せられなば之を處罰すべし。但し諸神に犠牲などを捧げて其の告發の誣妄なるを明かにせるものは、此の限りにあらず。

ビデニアに於ける迫害の此の一段の話は、羅馬帝國の内、他の各部分に於て行はれし窘迫の一斑を示すものなり。但し是時より後僅か二百

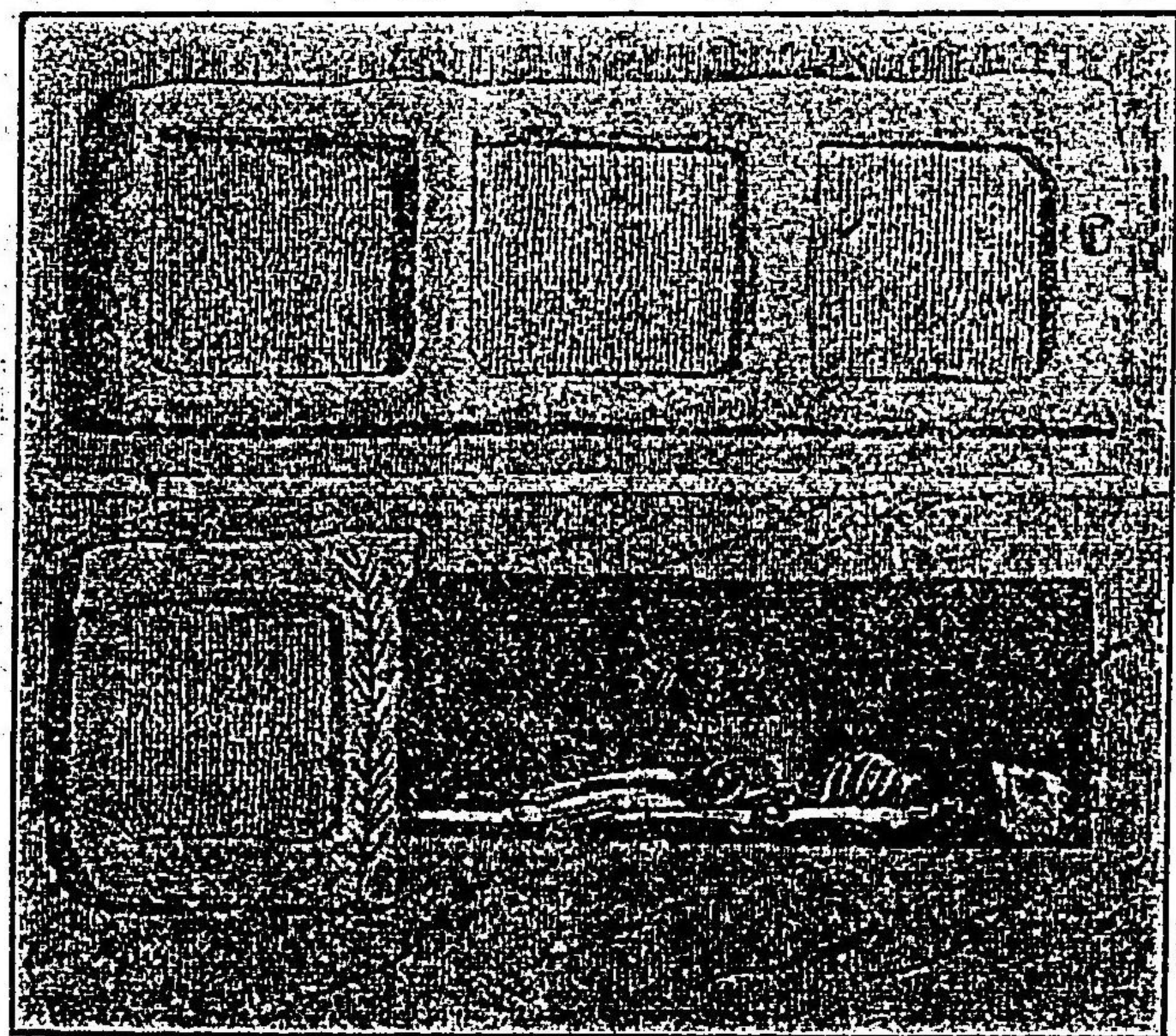
年餘にして他の羅馬帝コンスタンチンは同一地方即ちビテニアのニケアに三百名の基督教監督を召集して一大會議を開けり是れ實に感ずべき大變化と謂ふべし該の會議に於てニケア信經は天下に宣布せられたり是即ち一千五百年來世人が奉ずる所の信經なり。

ブリニ總督の上書中に「彼等基督教徒は或る定日に於て日出前に相會して基督教に讚美歌を唱ふ」云々の語あり何が故に日出前に相會せしや意ふに「日出前」とは必ずしも早朝の謂ひにあらず是れ當時の基督教徒が告發者或は迫害者の目を避けん爲に夜中重に禮拜を行ひたるを暗示せるものとす否然のみならず夜中も亦往々危険なりしかば當時の基督教徒は屢ば地下の窟室に禮拜を行ひたりと見ゆ羅馬附近には地下墳墓カタコームといふ

もの夥し是れ基督教徒が地下に入りて人知れず禮拜をなし又同教徒の屍體を人知れず埋葬したる處とす其の廣大なるは二十哩の延長を有すと稱せらるれど今は大方缺陷埋没して其の半ばにも達せずと云ふ勿論其の形種々なれども之が一斑を茲に示さんに开が地下の隧道大凡下圖の如し全體一種の岩磐より成り蜘蛛の巢の如く縦横せる隧道の左右或は前端には岩を穿ちて墳墓を造り屍骸を納めて其の口を密封し表に文字或は表號を書き或は刻む而して其の内部の廣大なるものに至りては適宜の宜位地に禮拜堂を設け優に幾百人を容るべしとぞ。



地下墳墓カタコームの内部(其一)

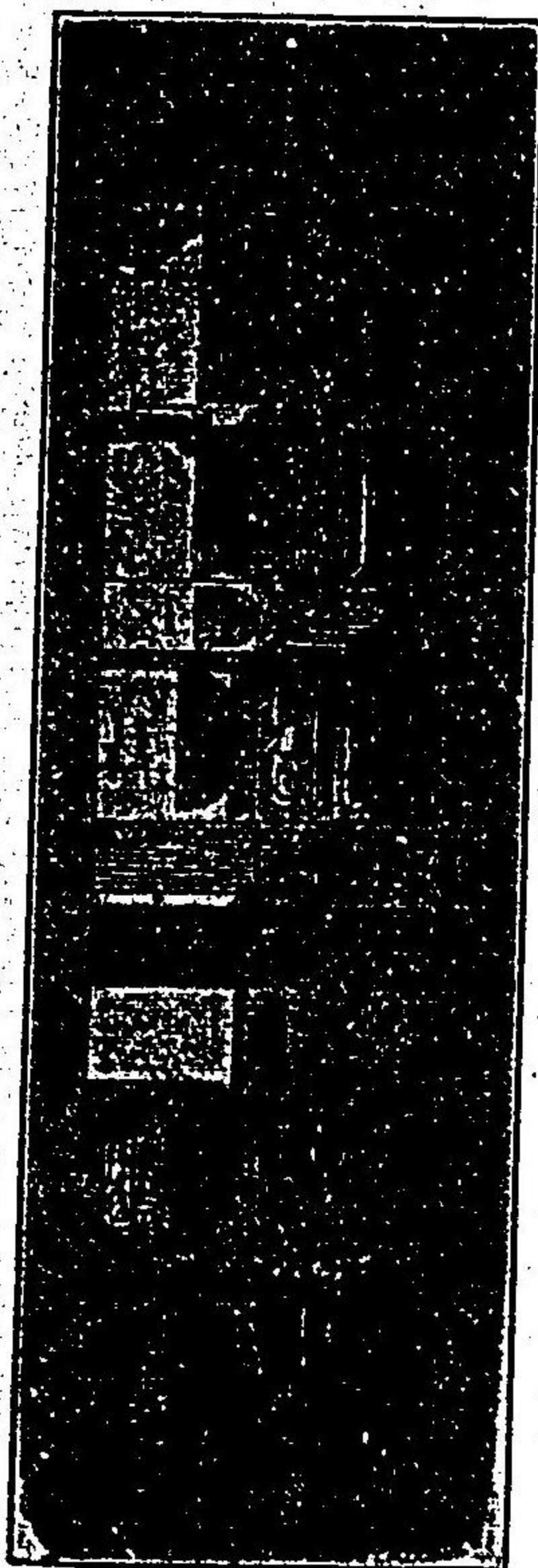


地下墳墓カタコームの内部(其二)



羅馬府カススタス地下墳墓一斑

分 部 る た ら び 用 て し と 聖 葬 禮 内 ム ー コ タ カ



案ずるに羅馬帝國に於ける當時の基督教徒は斯の如く生きては地下禮拜堂にて禮拜をなし死しては地下墳墓内に埋葬せられたり此の地下墳墓中に往々聖書又は教會史に出たる知名の人物の墓發見せられ基督教會の表號として世間に知らるゝ表號も亦同じく發見せらる而して其の中には羅馬の貴婦人にして基督教を奉じたる者もあり又聖保羅が其の羅馬人に與へたる書翰中に問安の辭を送りし人士數名の墓誌は地下墳墓中にアウガスタス皇帝の皇后リビアの解放奴隸間に發見せらるゝあり以て聖

書と歴史との符合を着々示すものあれば吾人は最早捏造假作等の文字を弄するの餘地を有せざるを奈何せんや殊に基督教の表號と最初より認められたる幾多の表號が此の往々甚だ古き地下墳墓中より出でたりとせば例へば十字架が外教の表號を摸擬したる者なりとは如何にして言ふことを得んや最初より十字架は基督の獻身を表する符號として敬禮せられたるが故に異教徒は此の點を執へて基督教徒も亦一種の偶像(十字架といふ者を拜む者なりと唱へて)逆振を喫はせんと試み例のテリタリアンなど大に之が辯駁に努めたるなり本来基督も無く十字架も無くは誰か物好きに十字架を禮拜せんや況して之が爲め身命をすら擲つをや論者の説の如きは全然人心の理を稽へざる空論のみ

當時羅馬の天下に棲息せる人々は皇帝を始め庶人に至るまで基督が十字架の釘死の確實なることを勿論の事實として信じてありき然ればコンスタンチン大帝羅馬帝國を統御するやパレスタインの耶路撒冷に於ける

所謂基督の聖廟 Holy Sepulchre を清掃せんと欲し、嘗てハドリアン帝が其の上にて建てたる希臘の魂神の宮を毀たしめ、更に大に搜索して遂に基督の聖廟の眞の位置を發見し、コンスタンチン帝の母君皇太后ヘレナは又基督のかゝりし十字架を發見せんと欲し、自らパレンスタインに來りて百方穿鑿せり。古傳に依れば、皇太后の此の舉は徒勞ならずして、總督ピラトが猶太人の王と稱し、以て今日に至りぬ。羅馬皇帝及び皇太后の此の苦心と勢と其の勢力を以てして、何ぞ此の穿鑿の徒勞に終るべけんや、必ず信據すべき者を發見し得たるならんと思はる。今日に於ける聖廟の如何に莊嚴なるかを見よ。

聖書の中にヨシヤバテの谷といふものあり、其の谷より摘み來りて聖廟の上に獻げたる花を十字架の形に貼りつけて、今日は參詣人に給與す。好ミゲと謂ふべし。嘗て「人生哲學」の著者リ博士がパレンスタイン探檢に往き



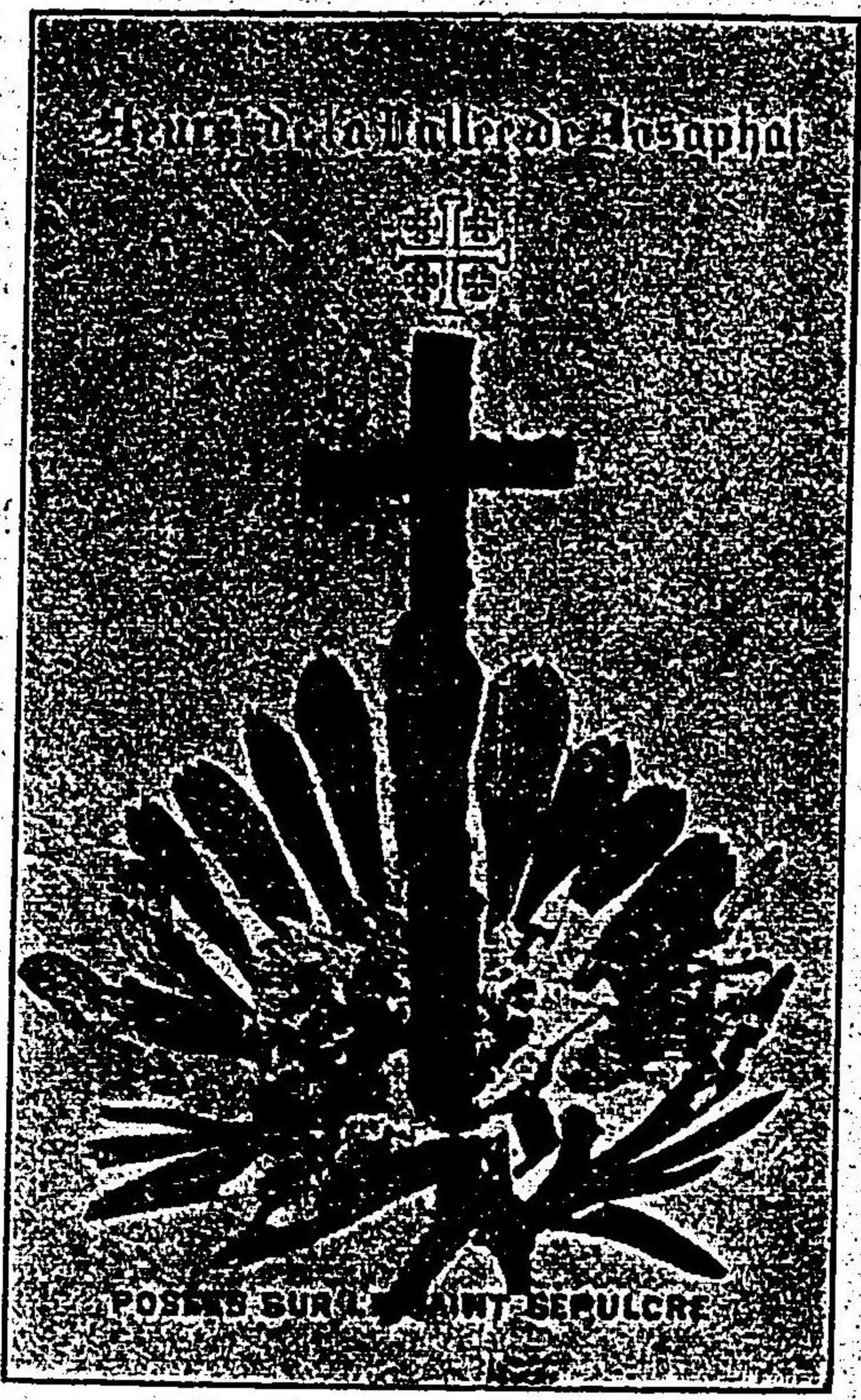
基督の聖廟



聖廟教會前之圖

て、著者に遙々パレスティンより贈り越されし者を今此に掲げて、讀者諸君と共に之を賞美せんと欲す。

斯くパレスティンの山河は依然として舊形を保ち、悠悠此の聖師の徳を謳歌して止まず、世人何爰を區々小弱氣を弄して此の神人を抹殺せんとは試むるや、基督ありては枕を高うして眠る能はざるか、余輩は既にシエークスピリルと基督とを比較して世人が



此の兩者を抹殺せんとするに汲々たる所以を講究せり此に至りて讀者の再閱を請はざるを得ず。

第八章

魚の表號——「ナザンのイエス」

何故に基督教は魚の表號を用ひしや

鹿を獵らんとする獵者は山を見ざるの例にや博覽洽聞なる某師は如何にもして基督を抹殺せんと欲し此の魚形表號に着眼するや忽ち豁然として悟入せられたり曰く

「基督の傳話は希臘の神話イクシオン Ixion より脱化したる者なり。」

何故に然るやと尋ねるに魚は希臘語にて *ichthys* と言ひ此が希臘字母 *Ichthys* を各々頭字として見れば即 *Co*ns (耶穌) *Chri*stos (基督) *Theo*n (神の) *Hyo*s (子) *So*lar (日) 即ち「耶穌基督神子主」と成るべきものとす因つて魚を以て表號の一と爲したりとは古來祖師たちが認めたりし解釋にして正確なるも



無形形の教皇

のと思はる。此處なる圖中に出でたる文字及び圖形は、エツクスは十字架の形にして、ビーはバックスとて平和の義とす。基督は即ち平和の王なりと也。其の之を用ひしは亦十字架の如く挑戰的ならずして、迫害を避くるにも使なりしが故なりけんか。

然るに希臘神話のイクシオンは、テラタリ國の王にして、惡逆暴戾、其の岳

父を招きよせて、之を火の穴に投じ、天下の誅罰を蒙むらんとして、ジュピテ神に救はれしが、其の恩を又仇にて返したれば、ジュピテ神大に震怒し、彼を地獄に投じて、永遠に回る車に之を縛りつけ、電鞭を以て之を打ち、其の罰無窮なりと云ふ。論者は此の如く、兇惡漢の生涯より、基督の傳記を採り出し、來らんとす。實に怪と謂はざるを得ず。而して此の不倫なる結合は、畢竟論者がイクシオンといふ希臘語を讀み、遠へたる結果ならずやと思はる。

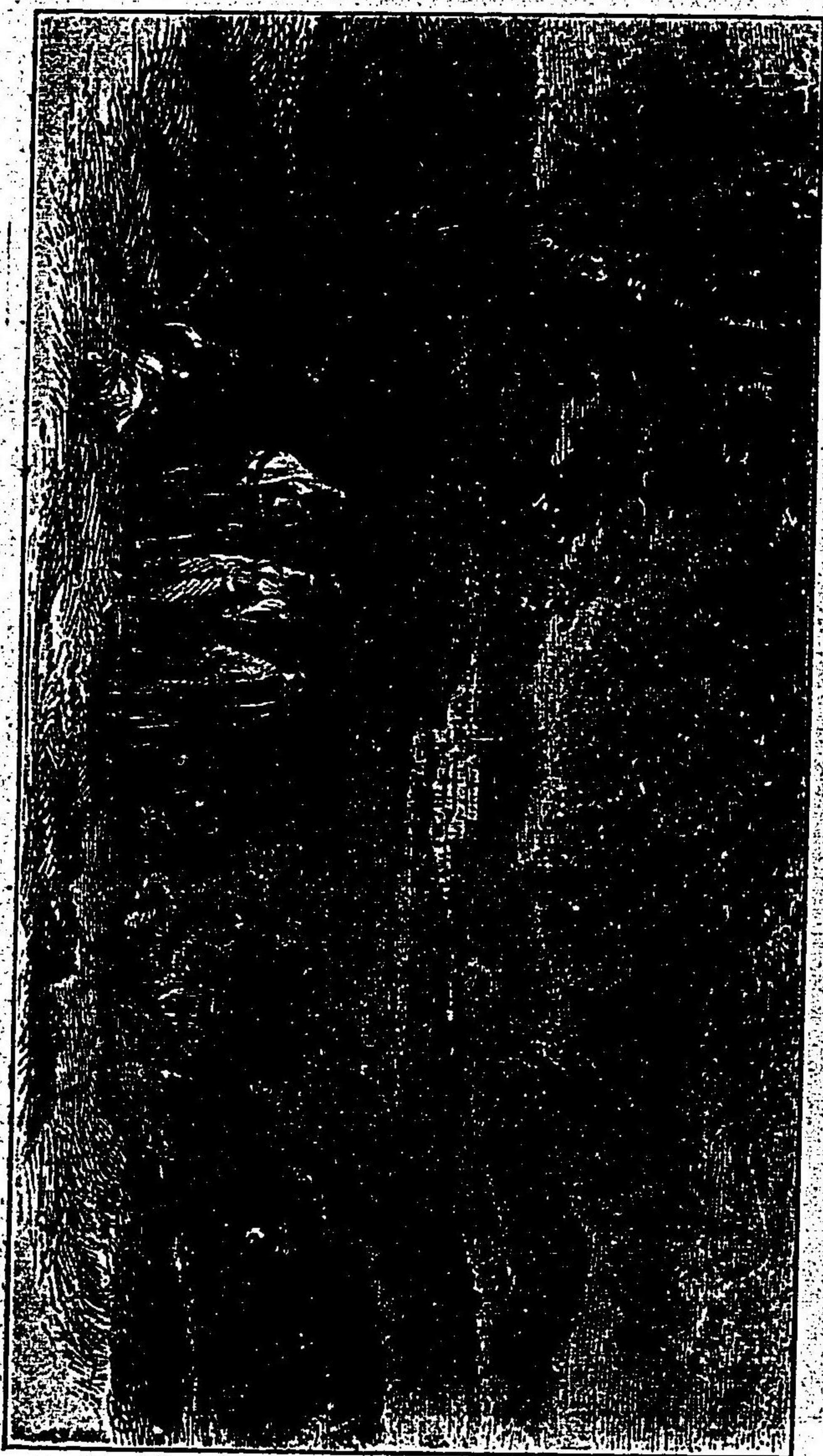
希臘語にては、クリスト christ といふ時の クロ と イクシオン Ixion といふ時の クス とは、全く異なれり。然れば、魚は、英語になほせば、Iohhys — IXOYC (希臘字母) となり、イクシオン Ixion — Ixiōn (希臘字母) となるが故に、單に字音の上に於ても、兩者の間に何等の關係の存するをも見ず。怪の又怪と謂はざるを得ず。天下の最大兇惡漢が突然天下の最大神人とまでも稱せらるゝ基督の原形と成り、而も何等の類似をさへ其字音の間にすら有せずとは、少しく滑稽とも見えんを恐る。畢竟希臘字母の ク が X と書きて、エツクスに似た

る所あるが故なりとす。然れどもオクシオンのクシは多なれば、決して混同すべからず。

其の他基督の高足子ペテロは岩石といふ意味なればとて、直ちに我が磐に奉強し、パウロは電車のポールと同じく痛棒漢の意味なりといふに至りては、餘りに笑談らしく又餘りに氣遣はしくして、十分に批評する能はざるを奈何ともする無し。

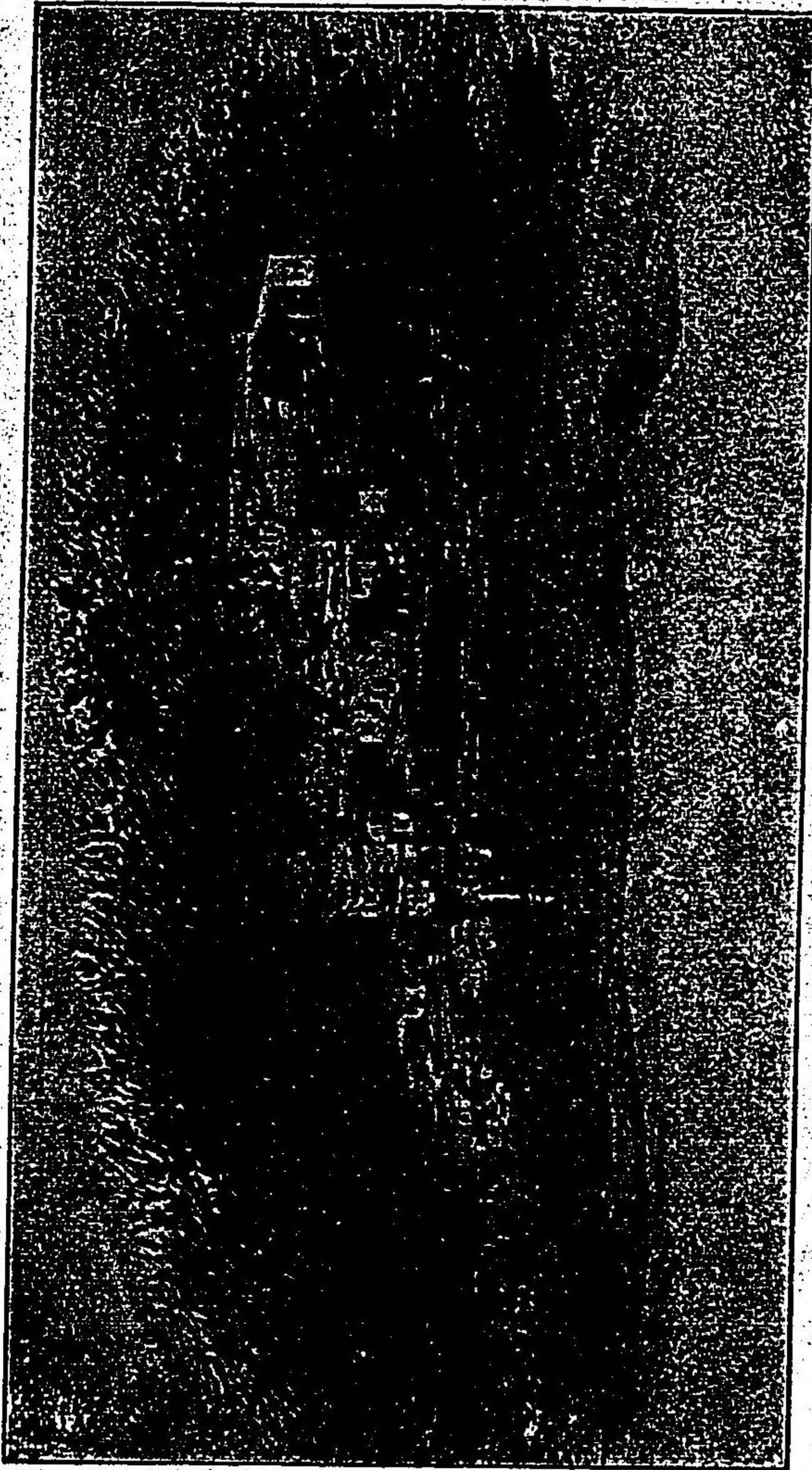
最後にナザレのイエスといふ名につきて一言せんに、論者は往々ヨセフの猶本史中にナザレといふ町村の名なきを見て、是れナザレと云ふ如き町は絶えて無かりしものなりと主張し、ナザレとは福音記者の捏造に基きて後人が建設したるもののみと論ず。ナザレとは云々の意味なれば、實際に存在せざりしと云ふが如きは、是亦一種の戯論にして、到底眞面目に聴く能はず。

聖書に依るに、預言者は其の故郷にては尊ばれずとの例に依つてナザレ



産 断 び 及 谷 渡 の 町 ナザレ

の人々はイエスを斷崖の下へ突き落さんと試みしが、イエスは悠然彼等を
通りて去りぬとぞ。今日のナザレ町は即ち此の如き町にして。



町のナザレるめ遊りよ西北北

勿論當時に在りては斯の如く發展しをらざりし僻陬の一寒村なりけんも
當時の人々が少しも怪しまざりし村を、今日の人が疑ふとは奇々怪々と
云ふの外なし。殊に況んや當時諺すらありて「ナザレより何の善き者出でん
や」とさへ言ひふらしたりと稱するをや。其の記事快活にして眼前に當時の
ナザレ人を睹るが如し。其の有無の如きは戲論のみ。況んやイザレ無かりし
が故に、基督も無かりしと説くは、多少狂的ならずやとしも思はれてタルム
ードには基督をガリラヤの巡廻師と稱せり。已に是にて足れるにあらずや
タルムード書には亦基督が埃及より魔術の種を持ち還りたる由を記した
れば是また基督の行ひし奇蹟を認識したるものとす。

羅馬の歴史家は基督教を「迷信」と呼び、猶太の博士たちは基督の奇蹟(廿世
紀聖書新釋を見よ)を「魔術」と貶せり。然れども其の實、敵人の語なれば是非も
無し。只併しながら前者は基督教の宗教なるを認め、後者は基督の行動の神
妙なるを認めたるに於て、共に基督の見証者と成り得たり。

是に由て觀きたれば、基督の存在を今日に疑ふ如きは太陽赫灼として三竿なるに、醫者の尙暗を吐やくが如し、只吾人は世の學者等が基督を抹殺せんと努むるの甚だ大なるを見て、此等の人々の心理状態を社會學の一問題として研究せんことを欲する也。

基督活殺論終

附錄 基督教會發達小史

一 教會史の淵源

教會史の淵源は一分は神に屬し、一分は人に屬し、開闢(天地創造)より使徒時代の終までは舊新兩約の天啓書ありて、神の國の歴史を成す、使徒等の逝去以來は只人間の著書記録あるのみ、是等の者(後者は勿論眞實無妄たりとは主張す可らざるなり、是等人間に屬する淵源は一分は書記せられざる者なり、

(第一)書記せられたる淵源は左の種類を包括す、

(伊)宗教上政治上の諸權力より出たる公文書、即ち宗教會議の議決條例、信經、禮拜式文、教會律法、並に法皇、監督及び代議團體の公書翰、

(呂)箇人の私文書、即ち最初の六世紀間に於る教會の祖師等、異端家及び異教記者等の著述物、中古に於る傳道者、煩瑣學派及び神秘學派の神學者、並に爾後十六世紀間の改革家及び受對者の著書、是等の書籍は歴史家に取られては最も豊富なる材料の淵藪なり、但し其取捨撰擇に至りては最も意を用ひざる可らず、就中議論の書に於ては異端に屬すると正教に屬するとを問はず、黨派心の爲に多少事實を枉げたる處あれば一層之が採否に謹慎ならざる可からざるなり、

(波)歴史家の記述、即ち敵たると身方たるとを論せず、凡て其目撃したる所を書記したる人々の記録、

(仁)墓碑上の銘誌、即ち迫害の際に於るキリスト信徒の信仰と望とを見はすが如き碑文墓誌、エジプト及びバビロンに於ては無数の記録墓中より掘出され且つ讀み解れたりしが、是等は神仙談、教法録、詔勅、並に歴史天文詩歌等を包含する者にして、已に斷滅せし太古の開明の一斑を示すに足り、又舊

約書中なる歴史の部分に幾分の光を與ふ、

(第二)書記せられざる淵源は遙かに數寡し、即ち教會堂、彫刻繪畫及び其他の記念物、宗教上の風俗及び儀式、是れ皆禮拜法の歴史に取て甚だ重要に、且つ當時の精神を見るに甚だ有用なる者なり、

一 教會史の時期

基督教の歴史は三代時期に分かる、即ち上古、中古及び近世是なり、

(第一)上古基督教の歴史、キリストの降誕より大グレゴリに至る、紀元一年五百九十年、此時期は「グリーキラテン教會」即ち教會祖師の時代なり、其の領分範圍は地中海の周圍の諸國——即ち西亞細亞、北亞非利加及び南歐羅巴を包括して、正に是れ古羅馬帝國及び古異教國の舞臺なり、教義に於ても政治に於ても、禮拜に於ても、後來の歴史のために凡て基礎を居ゑたる者は此時代なりとす、

キリストの生涯及び使徒の教會は教會史中に在て最も重要なる者なり、蓋し是等は神人合成の基礎を教會の爲にする、而して後來の時期を悉く感動し規正すればなり、

茲に第四世紀の初にコンスタンチン(第一の基督教帝位に即くに及びて教會頼に其面目を一變せり、基督教は即ち從來窘迫せられたる一宗門たるより一躍して忽ち天下に行はるゝ、大宗教となりぬ、教會の歴史にありてニケアの大會は嶄然特出して一紀元を成すの觀あり、是れ此大會はコンスタンチン帝の治世の真中に(即ち紀元三百二十五年に)開かれたればなり、

是に由て之を觀れば此に第一時代の内に三時期あり、即ち使徒の時期、殉教者の時期、基督教帝及び教會祖師の時期是なり、

(第二)中古の基督教、グレゴリ第一世より宗教改革に至る、紀元五百九十年——一千五百七十七年、

(第三)近世の基督教、第十六世紀の宗教改革より現今に至る、紀元一千五

百十七年——一千八百八十年、是等の三時期に左のごとく小分せらる、

第一期、

キリストの生涯及び使徒の教會、

救主の降世より約翰ヨハネの死に至るまで、——紀元一年——一百年、

第二期、

基督教羅馬帝國に於て迫害に遭ふ、

ヨハネの死よりコンスタンチン帝に至る、——一百年——三百十一年、

第三期、

基督教ギリキローマ帝國と合體して諸國民の大移動の暴風雨の中に在り、

コンスタンチン帝より法皇グレゴリ第一世に至る、——紀元三百十一年——五百九十年、

第四期、

基督教チウトン人種獨逸人種セルツ人種及びスラヴ人種魯西亞人種
の中に傳播す、グレゴリ第一世よりヒルデブランド即ちグレゴリ第七
世に至る、——紀元五百九十年——一千四十九年、

第五期、

教會羅馬法皇の權下にあり、煩瑣的神學を有す、法皇グレゴリ第七世よ
りボニフェス第八世に至る、——紀元一千四十九年——一千二百九十
四年、

第六期、

中古の一統教會カソリシズムの腐敗大改革の豫備運動
ボニフェス第八世よりルータールに至る、——紀元一千二百九十四年—
一千五百十七年、

第七期、

宗教改革及び羅馬教會の反動、

ルータールよりウエストフェリアの平和條約に至る、——紀元一千五百
十七年——一千六百四十八年、

第八期、

争辯的正教及び排他的信仰の時代、并に反動的及び進歩的運動、
ウエストフェリアの平和條約より佛蘭士革命に至る、——紀元一千六
百四十八年——一千七百九十年、

第九期、

不信の種子傳播す、ラシヨナリズム一時横行す、歐米に基督教復興し、傳
道の盡力地球上に徧ねし、
佛國革命より現時に至る、靈的新思想派起る、局面の一變——紀元一千
七百九十年——一千九百十年、

三 猶太教

「救はユダヤ人より出づ」約翰四の二十二、此奇異なる民は四面の偶像崇拜の中に屹立して、眞神の知識(しる)こと、其聖き律法及び其樂しき約束を擔んがため、隨つて又メツシヤの生處とならんが爲めに神に撰ばれたり、此の人民はエホバがアブラハムを召し、約束の地カナンに於て彼に契約を垂れまたひしより起り、其奴隸たりし地エジプトに於て一國民に成長し、エジプトより救ひいだされて後曠野に於てモーセの爲めにシナイ山の律法に基いて一神政國に組織せられ、ヨシユアに導かれてパレスチナに進入し、士師の後に至りて立君國君主國となり、ダビデとソロモンの世に其榮耀の頂巔に達し、頓て二個の敵國に分裂し、然る後其内部の不和の益々つものり、偶像崇拜の愈々増長せし罰として、異教國の君主に擄へ去られ、七十年の屈辱の後其父祖の國墳墓の國、本國に歸され、重ねて又異教國より來れる敵のために克服せられたりしが、斯く最も深き耻辱の中において、此民は世界の救主を生て、其至高の天職を全うせり、

猶太教は古代の諸の偶像國民と正反對に立ちて、其獨り挺然と孤處せし様は宛がら不毛の沙漠中に一片の翠綠(みどり)のちを望むが如くなりき、實に猶太教は嚴密なる道德法及び儀文法に分割せられ、環繞めぐるせられて異教とは終に混和せざりしなり、彼の聖地自身も亦舊世界の三大陸の眞中にありしと雖も、而して古代に於る文化の國民に圍繞せられしと雖も、南と東は沙漠に由て、西は海に由て、北は山に由て、是等の國民より分割せられたり、斯の如くモーセの宗教は外國より紛擾を蒙ることなしに安全に發達して其大事業を成し就ぐるを得たり、但しイスラエルは最初よりして其胸に一大約束を懷けり、即ち是れ地の諸の國民はアブラハムの裔によりし祝まらるべしと云ふ者なりき、信者の父たるアブラハム、大立法者モーセ、英王にして聖詩人たるダビデ、預言者の中の傳福音者イザヤ、テシベ人エリヤ、耶蘇が山にて榮光の姿に變り給ひし時、モーセと共に再び顯はれて耶蘇を崇めし者、全舊約の化現とも稱すべきバプテスマのヨハネ、是等の人々は古時の天

啓の鍵鎗の中に於る最も燦爛たる著明の金鑲なりとす、
 キリストの降誕の時に於る猶太人外部の形勢及び道徳上宗教上の狀況は一見實に彼等の神妙なる命運世界の救主キリストを己れの中より産するを謂ふと衝突矛盾するに似たり、然れども彼等の墮落こそ却つて神の救助の必要を明かにする者なりけめ、

四 所謂律法及び預言

猶太教徒の大體は墮落し腐敗したりと雖も、舊約の政治は神立制度にして基督教の贖罪(あがなひ)のために道を備ふる先驅たりき、故にキリストも使徒等も之を斯る者として深く尊敬せられ、之と同時に又痛言勵語(はげしきことば)を以て其重任に堪へざる不適當なる代表者(ユダヤ人)を悔改に導かんことを求められたり、

法律と預言は猶太教の二大原素にして、爲めに猶太教をして基督教の先

驅——直接に神の設けたまひし先驅——とならしむ、即ち是れ「なんぢら野にてエホバの途をそなへ沙漠にわれらの神の大路をなほくせよ」と呼はる者の聲となれり、

(第一)キリストの未だ降臨せられざる前に於てはモーセの律法は最も明かに神の聖意を發表したる者なりき、彼の十誡は古代の立法の神妙なる者にして、其二枚の石牌の中に眞の敬虔と道徳の概要——神に對する無上の愛及び人に對する愛——を命ず、是は正義の標準を示す者なるが故に、世人をして其正義を離れて邪道に入る事の深きを曉らしむるに最も効ありとす、即ち是れ世人をして自ら罪惡を感知せしむるに力あるなり、是は人をして信仰に由て義とせられしめんが爲めに之をキリストに導く教師なり

五 希臘文學及羅馬帝國

古代のギリシヤ人の文學と羅馬人の一統帝國とは、モーセの宗教に次で

世界を基督教のために準備するに與りて重に力ある者なりき、是等の二者は人形を供す、而して福音の神質——猶太神政の懷に在て十分に準備せられて——其中に模作かたどりくられたり、是等は天國の自然以上の建物のために自然の基礎を居すたり、神はギリシヤ人とローマ人に與ふるに最も豊かなる天稟の才能を以てし、彼等をして基督教の助なしに出來べき至高の開明に達する事を得せしめたまふ、是れ彼等をして一には人間の學問藝術及び法律の諸機械を備へて教會の使用に供せしめんが爲め、一には是等學問藝術法律の者のみにては全く世を祝み又救ふに足らざる事を示さしめんが爲めなりき、

ギリシヤ人は人間てふ觀念を其自然の壯と美とに於て、——併ながら亦其自然の不完全に於て顯はせり、彼等は學問と藝術學藝の原理を開發せり、ギリシヤ國は使徒等に最も富贍なる最も美麗なる言語、ギリシヤ語を謂ふを與へて、之を以て福音の神妙なる眞理を發表せしむ、實に神は久き前よ

り政治上の運動を然か安排し、已に彼の言語をして天下に廣まらしめ、文明開化と萬國交際の機關とならしめ給ひき、羅馬法律の保護の下に在て使徒等は徧く天下に旅行することを得、又羅馬領内の各都會に於て希臘語を以て己れの意を諸人に通ずるを得たり、

ギリシヤ哲學——特別にもプラトとアリストートルの哲學系は、基督教神學のために自然の基礎を形かたちくれり、ギリシヤの能辯術は神聖基督教演説のために自然の基礎を形かたちくれり、ギリシヤの美術は基督教教會の美術のため、に自然の基礎を形かたちくれり、最大なる教會祖師の中の多くの者に取りては即ちジャスチン、マール、アレキサンデリアのクレメント、オリジエン、及び亦幾分かアウガスチンに取りても、ギリシヤ哲學は基督教に至るの橋となり、彼等をキリストに導くの師となれり、實に最初のギリシヤ教會の全體はギリシヤ語とギリシヤ國民を基礎として起りし者にして、是等二つの者を離れては到底説明す可らざるなり、

羅馬人は古代の實際的政治的なる國民なりき、彼等の天職は國家てふ觀念と國法てふ觀念を實行し、ユフラテ河より大西洋に至るまで、リビアの沙漠よりライン河畔まで、天下の萬國民を搏て一箇の巨大なる帝國を建造するにありき、此の帝國は亞細亞、亞非利加及び歐羅巴の最も肥沃なる開明國を含み、其人口は凡そ一億萬人に達せり、恐らくは是れ基督教の起初に於る世界の總人口の三分の一にあたるならん。

羅馬人は最初より自ら天下を治むべき天職を有すと信じたり、劍を以て世界を征服し、既に之を征服すれば、凜然として犯す可らざる法律を以て之を経綸し、平和の技術を以て之を粧飾せり、アウグスト帝は羅馬を煉瓦の矮屋より蠟石の宮殿に化したり、ギリシヤよりは最も美なる繪畫及び彫刻物輸入せられたり、世界各部の財寶は該府の傲慢美麗及び驕奢をくくるの具となれり、此巨大なる帝國の四境は巧みに敷設せられたる道路に由て、軍事上商業上、文學上の交通を迅速にせり、其跡今尚スリア、アルプス、ジイン河畔

に存して見る可し、旅行の便利及び安全は羅馬帝王の治世に最も大いにし、爾來十九世紀までは未だ曾て之に及ぶ時代あらざりき、五條の大路羅馬より出で、該帝國の四邊に達し、諸海港に於て海路と連なれり、

但し又他方より觀來れば、羅馬一統帝國は實に福音の一統帝國の確實なる根基地脚なりき、羅馬の兵は國民と國民との間に古來存したる牆壁を毀ち、開明世界の極端と極端(四境)とをして自在に交通せしめ、普通の言語及び教育、普通の法律及び習慣の鏈を以て、東西南北を一に結合せり、是の如く羅馬人は知す識す彼の宗教——信仰と愛の靈なる鏈を以て萬國の民を神の唯一つの家族に結合する所の宗教——の迅速なる一般の進歩の爲めに路を開きしや明かなり、

羅馬の國法及び諸制度並びに之れが行政の大才は基督教會の外部の組織を助けし事多し、ギリシヤ教會がギリシヤ國民を基礎として起りし如く、拉甸教會は舊羅馬を基礎として起り、舊羅馬の功德と瑕瑾とを共に復此に

再現せり、即ち羅馬加特力教(カトリシズム)は異教の羅馬がバプテスマを受し者なりとす、

六 猶太教と異教の接觸

羅馬帝國は直接には只外部の政治上の聯結を堅立したる者に過ぎざりしと雖も、間接には猶太人と異邦人の相敵視する兩宗教をして智力上道徳上共に互に相近づかしむるの結果を呈したり、蓋し是等兩人種はキリストの十字架の妙力によりて相和合して共に神に在て兄弟となるべかりし者なり、

(一)ユダヤ人はバビロンに擄へ移されし時より以來世界中に散ばれり、ペントステの奇蹟を見たる人々の中には天下の諸國より來れるユダヤ人及びバルテア人、メディア人、エラム人、及びメソポタミア、ユダヤ、カバドキミア、ポント、アジア、フルギア、バムフリア、エジプト、又クレネに近きツグエの

地などに住る者、またローマより來りて居るもの、或はユダヤ人及び其教に入りし人、又クレネ人、アラビア人等ありしと云ふ、異邦人が嫌ひ惡むにも拘はらず、ユダヤ人は早くも才智と勤勉とを以て財産を造り、勢力を得、一切の特權を享受するに至り、羅馬帝國內の商業都會には盡く已に自家禮拜用の會堂を建てたり、基督紀元前六十三年に羅馬の大將ポンペイは猶太人の俘虜を夥しくエルサレムより羅馬に携へ來りて、之をテベル川の左岸に住居せしむ、此社會を此に設置するに當りてポンペイは知ず識ず羅馬教會の爲めに重なる材料を供したり、

ユダヤ人の此散在に由て眞神の知識の種及びメッシヤ(救主)の望の種は偶像世界に散布せられたり、舊譯聖書はキリストの降世より二百年前に既に希臘語に翻譯せられ、爾來公開なる神の禮拜に於て朗讀せられ、且つ解説せられたり、猶太人の會堂は各々唯一神教の傳道場としも稱すべき者なりしを以て、使徒等が彼の律法と預言とを成就せしむるイエス、キリストを宣

傳ふるに當りて、甚だ好都合なる場所となり、自然の預備となりぬ。

(二)また他方に於てはギリキローマン異教は其言語、哲學及び文學に由りて、猶太人中の高等にして學識ある種類の人々の狂妄なる頑信を柔らぐるに與りて頗る力ありき、惣體四方に散左せる猶太人——希臘語を話し、ヘレニストと稱せられし猶太人——は自國の語を保てる眞の希百來人即ちパレスタイン猶太人よりも遙かに開けて胸襟廣かりき、此事は異邦の傳道者サイプラスのバルナバ及びタルソのパウロに於て著しかりき、又エルサレムの教會に對比してアンテオケの全教會に著しかりき、ヘレニスト體の基督教は基督が異邦人に傳はる自然の橋なりき。

猶太人の元素と異教の最も著明なる變移的——但し甚だ空想的神智學的なる——結合はエジプトの首府アレキサンデリアの學者社會に於て、又ファイロの哲學系に於て之を見る、ファイロはキリスト紀元前二十年頃生れ、紀元後四十年まで世に在りき、但しキリストにも使徒等にも接せし事は

あらざりしなり、此猶太の神學者は舊約書を巧みに——併ながら攪に——
 比喩的に解釋して、モーセの宗教をプラトの哲學に一致せしめんと試みたり、彼は又箴言及び智慧の兩書よりしてロゴス(言)の説を案出せり、然るに其説たるや約翰傳福音書の説と著しく相似たるを以て、多くの論者は謂へらくヨハネはファイロの著書に通じたるか、然らざれば少くともファイロの名稱(ロゴス)に通じたるならざる可らずと、然れどもファイロの臆説は之をヨハネの所謂肉體となれる言に比するに、影の體に於るが如く、夢の實に於るが如し、ファイロは神が人となりて降りたまふ事には想ひ至らず、然れども彼が臆説と基督降世の大事實と期せずして符合する所また甚だ著明なりとす。

(三)斯の如く四方八方に於て基督教のために途は備へられたり、或は陽的に(積極的に)、或は陰的に(消極的に)、或は直接に、或は間接に、或は理論に於て、或は實際に於て、或は眞實に由て、或は誤認に由て、或は僞信に由て、或は不信に

由て、或は猶太の宗教に由て、或は希臘人の學問に由て、或は羅馬人の勝利に由て、或は猶太の思想と異教の思想との無益なる混和に由て、自然の開化哲學技術及び政權の無能力に由て、古宗教の衰滅に由て、當時の一般の混亂と患難とに由て、凡て熱心なる慷慨なる人々が拯救の宗教を切望する事に由て、基督教のために途は備へられたり、

「時の満るに及びて」世界が絶望に瀕せる時、處女の子人類の弱きを愈さんとて生れたまへり

七 使徒時代の一般の性質

使徒時代の長短及周圍物

使徒時代はペンテコステの日より約翰の死にまで亘りて、紀元三十年より百年まで凡そ七十年を含む、其運動の地はパレスタインにして漸々にスリア、小亞細亞、ギリシヤ及びイタリアに廣まる、其最も著明なる中心はエル

サレム、アンテオケ、及び羅馬にして、各自に猶太の基督教、異邦の基督教、及び聯合一統基督教を代表す、之に次ぐ者はエペソ及びコリントなり、エペソはヨハネの居住と勞苦(ほねをり)とに由て特に大切なる者となりぬ、而して又ヨハネの勞苦は第二世の間ポリカルプとイレニウスに由て世間(よ)にあらはれたり(如何となれば此二人はヨハネの弟子なればなり)、サマリア、ダマスコ、ヨツバ、カイザリア、ツロ、クプロ、小亞細亞の諸國、トロアス、ピリピ、テサロニカ、ペレア、アテンス、クレテ、パトモス、マルタ、ブテヲリ等も亦基督教が植られたる諸點として世に其名を知らる、基督教は又ピリピに感化せられたる寺人によりてエテオピアの女王カンダケの宮廷に達したり、紀元五十八年にパウロは早くも己に「我はエルサレムより徧くイルリコに至るまでキリストの福音を傳へたり」と云ふを得たり、羅馬書第十五の十九「パウロは後に之(基督教)を羅馬に携へたり、是より先き此教は己に彼處(かこ)にも知れをりし、斯くて後またパウロは羅馬帝國の西端イスパニアにまで到りしと見ゆ、

第一世紀の中に福音の及し國民はユダヤ人、ギリシヤ人、ローマ人なりき、又福音の用に供せられし言語は希伯來語ヘブライ語或はアテメーク語及び特別にも希臘語ギリヤク語なりき、希臘語は當時文化の機關たり、羅馬帝國内に於る國際萬國交通の機關たりしなり、

是と同時に俗歴史はタイベリアスよりニロまでの羅馬帝の治世を包括す、是等の羅馬帝は或は基督教を無視し、或は之を迫害せし者なり、茲に我等はヘロデ、アクリツバ王第一世に接す、彼はヘロデ大王の子にして使徒ヤコブを殺せし者なり、其子アクリツバ王第二世に接す、彼はヘロデ家の最後なる者なり、彼其妹ベルニケと云ふ最も腐敗せる婦人と共にパウロの辨解を聴きし事あり、使徒行傳二十五の十三以下を見よ、二名の羅馬知事ペリクセスとベストに接す、パリサイ人及びサドカイ人に接す、ストイク人及びエピクリアン人に接す、エペソの殿堂と戲園シバに接す、アテンスに於るアレクサンドロスの法庭に接す、羅馬に於るカイザルシーザルの宮殿に接す、

(1) 材料或知識の淵源

使徒行傳及び保羅の書翰は紀元六十三年に至る迄信すべき告知を我等に與ふ、ペテロとパウロはニロ帝の迫害の火の中に歿し去りぬ、實に彼の烈火は基督教自身をも焚くが如く見えたりき、數年を出でざるにエルサレム之に次で滅亡せり、

第一世紀の末三十年は奇妙に暗黒の中に閉られ、之を照す者としては只ヨハネの書物かきものあるのみ、是れ教會史中に在て余輩が知ること最も少なく、知んと欲すること最も多き時期なりとす、此時期は教會には謠誕多き批評家には臆測多き時なりき、

(2) 成功の原因

第一世紀の末に於てキリスト教徒の數は幾許なりしか毫しも知るに由なし、當時に於ては統計報告の如き者絶て無りしが故なり、ペンテコステの日には一日三千人感化せられしと云ひ、ニロの治世には莫大の群衆殉教の

死を遂しと云へば、信徒の數の甚だ大いなりしを推想するに足る、然れども
 會衆信徒の(團結)の多數は必らず小さくして、屢々只貧人の一握たりしのみ
 ならん、田舎の地方に於ては異教最も長く行なはれて、コンスタンチン帝の
 時代の後までも尙其跡を絶たざりしなり、基督教に感化せられし者は大抵
 中等及び下等社會に屬して、大くは漁夫、農夫、職工、商人解放されし奴隸及び
 眞の奴隸等なりき、使徒パウロ曰く、

「召を蒙れる爾曹を觀よ、肉に依る智慧ある者多からず、能ある者おほか
 らず、貴き者多からざる也、神は智者を愧しめんとて世の愚なる者を選び
 強者を愧しめんとて世の弱者を選び、また神は有者を滅ぼさんとて世の
 賤き者藐視するもの即ち無が如き者を選びたまへり、これ凡ての人神
 前に誇ることなからん爲なり、」(哥林多前書一の二十六—二十九)

然しながら是等の貧寒にして不文なりし教會は最も貴き賜物を受る者
 となり、聖哲の深思熟慮を喚起し得るが如き最も深渺なる問題、最も高遠な

る思想に意を注げり、基督教は基礎(土臺)より段々上へ建あげられたり、
 第四世紀の初に於てコンスタンチン帝が基督教に入りし時に方りては
 基督教徒の數すでに千萬または千二百萬に達したるならん、是すなはち殆
 んど羅馬帝國の惣人口の四分の一に當る者なりとす、或人々は之を一層多
 く算す、

基督教が斯く最も不利不吉なる事情の下にありて斯く迅速なる成功を
 得たるは實に驚くべして、其尋常の宗教に非るの明瞭と謂ふ可し、此大成功
 は已れに無頓着なる或は已れに敵對する世界の面前に於て、一滴の血も流
 すこと無しに、全く靈神上道徳上の手段に由て成就たる者なりき、ギツポン
 は此迅速なる廣布を五つの原因に歸せり、即ち(一)基督教徒が猶太人より嗣
 得たる無容忍なれども又包容濶大なる宗教的熱心、(二)靈魂不滅の説之につき
 て古代の哲學者は只漠然たる夢の如き思想を有せしのみ、(三)極初の教會に
 ありてふ奇蹟力、(四)最初の基督教徒の一層純潔なる而かも嚴峻なる道徳、(五)

教會の一致及び紀律、教會は斯る特質をもちて羅馬帝國の中心に於て漸々に日に月に盛んなるの共和國(コンモンウエルズ)を形くれり、是れギッボンが列擧せる所の原因なり、然ながら是等の原因は、適當に之を理會せば、一として基督教の殊勝なると天啓なるを指示せざるは無し、是れ其の重なる原因なり、然るに彼の自然神教的歴史家は此肝要なる原因を度外に置けり

(3) 使徒時代の重要な事

キリストの生涯の基督教の神人的源頭なり、使徒の時代は猶太の會堂と全く別異なる組織體として設立せられたる基督教會の源頭なり、使徒の時代は是れ聖靈時代なり、感動の時代なり、萬世の爲めに法を立てたる時代なり、

此に其本來の新鮮と清潔に於て新創造の活水涌出す、基督教は神妙不測なる一物として飄然天より降り來れり、然れども是また昨今の物に非ず、久しく已に預言せられ、準備せられ、而して人生の至深なる需用に適應せる者

なり、此教の始めて此罪の世に入んとするや、不信の猶太人と異教人とを感化せんが爲めに微祥(しるし)と奇蹟(ふしぎ)と聖靈の非常なる顯現等ありて之に伴ふ、此教は永久に此墮落せる人種と共にやどり、戦ふことも無く、血を流すことも無く、靜穩なる、パン種(種)然たる働を以て、之(墮落)せる人類を漸々に眞理と正義の國に化せんことを務む、外見に於ては謙卑賤陋なれども、確乎として其の神より起れると永遠の命運を有することを知覺す、金銀は無しと雖も、神妙の賜物と能力とに富み、信仰に堅く、愛に熱し、望に由て樂しむ、天の朽ざる寶を土器の内に盛りて、是れは地球萬國民の唯一なる眞實にして完全なる宗教として歴史の舞臺に現はる、初は肉心者の眼には微少にして侮るべき者とさへも見え、ユダヤ人にも異教人にも共に憎まれ迫害せられたれども、今や此教はギリシヤの智慧と羅馬の權力とを打負かし、忽ちにして十字架の旗をアジア、アフリカ、歐羅巴の大市に立て、自ら世界の望た

諸時期、諸人物、諸傾向の萌芽は悉く此に藏す是は教理と紀律の至高なる標準を示す、是は一切の眞の進歩に感動を興る所の勢力なり、

(+) 代表的使徒

ペテロ、パウロ及びヨハネは撰抜の三人として嶄然卓立し、使徒時代の大事業を成就け、其書物と儀表(てほん)とを以て後來の時代に大勢力を及ぼせり、茲に勢力の中心三つありて彼等に配す、即ちエルサレム、アンテオケ、ローマ是なり、

ヤコブとペテロの勞は使徒行傳につきてエルサレムの會議(紀元五十年)の少し後まで之を窺ひ得べし、パウロの勞は同書に就きて最初の羅馬禁監(紀元六十一年より六十三年まで)までを學び得べし、ヨハネは第一世紀の末まで生存せり、彼等の最後の運命につきては新約書中に何の信據すべき記事あるを見ず、然れども古代の人々の一般に證言する所に依れば、ペテロとパウロはニロ帝の迫害の間または其後羅馬に於て殉教の榮死を遂げたり

と云ひ、ヨハネはエベソに於て天然の死をなしたりと云ふ、使徒行傳は尙生きて働きをるパウロ——今や羅馬に囚へられをり、憚らず神の國をのべ、主イエス、キリストの事を教て禁げらるゝこと無しし「パウロ」——に説くだりて、違か筆を絶つ、

八 使徒時代の年歴

使徒時代の年歴は——幾分は少くとも若干年内は——確實にして、幾分は臆度に止まる、即ち紀元後三十年より七十年までの重大なる出來事につきては確實にして、其の中間に起りし出來事および第一世紀の最後の三十年につきては臆度に止まる、其淵源は新約書殊に使徒行傳及びパウロの書翰、シヨセーフアス、及び羅馬の歴史家にして、其中シヨセーフアス(紀元後三十七年に生れ、百三年に死す)を以て殊に價直ありとす、是れ彼はエルサレムの滅亡までに達する猶太史を書きたればなり、

左の時日は多少確實にして、大抵の歴史家が承認する所なり。

(一)紀元後三十年五月ペンテコステの祝祭に於て基督教會創立す、是れキリストが紀元前四年若くは五年に生れ、紀元後三十年の四月三十三歳にして十字架に釘せられ給ひしとの斷定に本づく者なりとす。

(二)ヘロデ、アグリッパ王第一世紀元後四十四年に薨去す(シヨセフアスに依る)、此事はヤコブの殉教、ペテロの投獄及び脱免(使徒行傳第十二章の二節及び二十三節の時日を一定す)。

(三)紀元後五十年に於てエルサレムに使徒會議を開く(使徒行傳第十五章一節以下、加拉太書第二章一節より十節、此時日はパウロの感化まで逆に後に算へ、又其カイザリアに囚へられし時まで順に(先に算ふれば、確知するを得べし、パウロは多分三十七年に感化せられしならん、其感化の日よりエルサレムに於る使徒會議までに十四年)を經過したりと云ふ、但し年歴學者はパウロの感化の年代につきて一致せず、其時日は、紀元後三十一年より四十

年までに住來す。

(四)加拉太書、哥林多書及び羅馬書の書かれたる時日は紀元後五十六年より五十八年の間に在り、但し羅馬書の時日は、羅馬書自身の所説と使徒行傳の陳説を比較すれば、殆んど其月までも指定するを得べし、此書羅馬書は、パウロが羅馬に往かざりし前に書きし者なり、即ち彼がユダヤにある貧き兄弟のためにマケドニア及びアカヤに於て義捐金を募集することを終へて後、イスパニアに往く途次、みちのついでにエルサレム及び羅馬を訪んごとて出たつ際に書きし者なり、而してパウロは哥林多の東港に於る教會の女執事ファイベに托して此書を羅馬におくれり、是れ當時彼れ彼處(哥林多の東港)に在りたればなり、是等の跡に由て考ふれば、是れ紀元後五十八年の春なりしこと明かなり、如何となれば彼の年にパウロはエルサレムに於て囚へられてカイザリアに移されたればなり。

(五)パウロは紀元後五十八年より六十年までペリクセスとベストスが方伯

(つ)かきたりし間カイザリアに囚はれをれり、彼等(ベリクスとベストス)は六十年或は六十一年に互に其地位を交代せり、多分六十年なりしならん、此重要なる時日はジョセフアスとタシタスの著書中に發見せらるゝ文字を參伍して之を確定するを得るなり、此時日は是より逆に算ふれば、同時に又我等をして其時より以前に係るパウロの遭遇(即ち彼が身上に起りし出來事)の時日を幾分か指定するを得せしむ、

(六)紀元後六十一年より六十三年までパウロ羅馬に於て第一の禁監に遇ふ、是れ第五項の時日を使徒行傳第卅八章三十節に照して得る所の時日なりとす、

(七)羅馬監禁中の書翰即ち腓利比書、以弗所書、哥羅西書、腓利門書は紀元後六十一年より六十二年までに書かる、

(八)ニコ帝の迫害は紀元後六十四年に始まる(タシタスの言に依れば是れニコ帝即位の第十年なりしと云ふ)、パウロとペテロの殉教は或は此年に、或

は口碑に依れば數年後に起れり、此疑問は一にパウロの第二羅馬禁監に依て決す、

(九)紀元後七十年にタシタスエルサレムを滅す(ジョセフアス及びタシタスの言に依る)、

(十)トレージャン帝の登極の後即ち紀元後九十八年にヨハネ天壽を以て没す(一般の教會傳説に依る)

網要的福音書(馬太馬可及び路加の三福音書、使徒行傳、牧會書、希百來書)並に彼得、雅各、猶太の書翰の時日は詳かならず、只其エルサレム陷落の前、大抵紀元六十年より七十年の間に書かれたるを知るのみ、ヨハネの書は彼の時日(六十年——七十年)よりも後に出たり、其書かれしは第一世紀の將に終らんとせし時なりき、但し黙示録は然らず、彼書につきては第一流の學者の中其内部の顯蹟を推して、之を六十八年若くは六十九年に配する者あり、是即ちニコ帝の崩御とエルサレムの滅亡との間に介まる者なりとす、

九 耶路撒冷の教會及び彼得の事業

エルサレムの群信徒は猶太的基督教の母教會となり、随つて又全基督教の根本教會となりぬ、是れは使徒等の直接の指導を受けて、重にペテロの訓導に由りて内部にも外部にも共に成長發達せり、此ペテロは即ち主が其見るべき教會を地上に建るの業に於て特に重任を負托し給ひし者なり、使徒等は若干の長老に輔翼せられ、之に加ふるに七人の執事、即ち貧き者と疾める者などを顧みんが爲めに撰任せられたる人々を以てせり、但し聖靈は全會衆の中に働きて、何れの職にも限らざりき、當時に在て教會進歩の機械たりし者は福音を宣る事、イエスの名を以て奇蹟を行ふ事、及び信仰と愛とに於ける聖潔なる生活の牽引力能く人を牽く力等なりき、基督教徒——即ち最初自ら弟子、兄弟、信徒、聖徒等と稱したる人々——の數忽ちに上りて五千人にいたれり、彼等は使徒等の訓誨の下に堅く止まり、之と交際をなして

敢て失墜せず、日々に神を禮拜し、主の晩餐を守るの傍に又愛筵(アガペ)を行ひて親睦を事とせり、彼等は自ら神の一家族なりと感じ、一箇の首イエスキリストの下にある一體の肢なりと信せり、其友愛の熾んなるや彼等は遂に自ら進んで其財産を共にするに至れり、——是さながら歴史の終に起るべき理想社會を預表するに似たり、——但し此制たるや他の教會を此制に束縛するの力ありし者には非ず、彼等は其新生活が許す限り、又イスラエルを一國民として感化するの望ある間は、神殿の禮拜及び猶太の諸例を守ることに注意をささ怠りなかりき、彼等は其主キリストが爲したまひし如く日々に神殿に往きて教誨せり、但し其祈禱感謝等の會をば私家に於て之を開けり、

ペテロが人民と議會(サンヘドリーム)とに對して爲したる演説答辯は極めて眞率にして又極めて適切なり、是れ熱心と銳氣とを以て充ち満ちたれども、又智慧と勸説とを具へて、いつも肯綮に中らざるは無し、是等はと實際的

にして有功なる説教は爾來他に其比を見ざるなり、是れ數週前までは甚だ臆病なりしが、今は甚だ大膽にして、何時にても道のために苦を受け死を甘んせんとする見證者耶蘇に親灸せし者の證言なり、是れ彼がイエスは活る神の子救主キリストなりと明言したる者を敷衍せるなり、彼が宣し所はメツシヤイエスの磔死及び復活其大なる体徴と奇蹟のために聽衆に知れ、わたりたるなりき、其の全能なる神の右に昇りたまひし事なりき、聖靈の降注及び勢力なりき、預言の應驗なりき、將に來らんとする大審判及び萬物の恢復なりき、我等が由で救はるべき唯一つの名として耶蘇に歸依するの極めて必要なる事なりき。

但し此極初の使徒社會に在ても内部の腐敗は己に顯はれたり、是に於てかペテロが偽善なるアナニアとサツピラに與へしが如き畏るべき宣告ありて、紀律戒行極めて厳しかりき。

最初基督教は人民の氣受よかりき、然れども忽ち亦其創立者が蒙りたる

と同一の迫害に遭遇せざるを得ざりき、但し是只前の如く終には禍を轉じて福となすに至るべき者にして、是を却つて該教の成長進歩の機會たりき。此の迫害の倡首たりし者は懷疑を以て特質とせるサドカイ宗徒なりき、彼等は當時使徒等の説教の中樞たるキリストの復活説を痛く悪くめり、エルサレムなる教會の七執事の一人ステパノ——信仰と熱心充ち満ちて、天晴パウロの先驅たりし者——侃々として猶太教の邪曲及び頑固を攻撃し、モーセ制度の將に覆らんとするを明言するや、パリサイ宗徒も亦サドカイ宗徒と力を發せて福音に抵抗せり、此時まで基督教は——少なくとも外面だけ——猶太教の神殿禮拜テンプル、ウラルシブと關係しむたりしが、茲に斷然此風を脱離するに至りぬ、ステパノ自身はモーセを謗譏すと誣告せられて、其著明なる辯護説を吐露したる後、暴徒のために石にて打殺され、畢りの紀元後三十七年、斯の如く彼は彼の爾來其血を以て教會の地味を肥やしたる群殉教者の率先となれり、ステパノの殉教の血よりして忽ち異那

人の大使徒躍り出たり、——彼れ異邦人の大使徒は、今やステパノの最大迫害者にして、彼れが勇死を目撃し、彼が死なんとする面にキリストの榮光あるを認めたりき。

ステパノの石擧は一般の迫害の合圖ありき、而して同時にまたパレスティン全地及び其四隣に基督教の傳播する暗號なりき、此事の後久しからずしてカイザリアのコレネリヲの感化おこれり、異邦人に傳道するの門戸は之が爲めに開けたり、此の重大なる出來事に於ても亦ペテロ之が主たる役者なりき。

凡そ七年ほどの平穩の後エルサレムの教會はヘデロ、アグリッパ王の下に在て再び新迫害を蒙むれり(紀元後四十四年)、ヨハネの兄弟ヤコブは此時に首を斬られたり、ペテロも亦囚へられて同様の刑に定められしが、不思議に救はれて、頓てエルサレムを去り、教會をば主の兄弟ヤコブに委託せり、ユセピアス、ジエロム及び羅馬教の歴史家は言ふ、此時ペテロは早くも——假

令永住の爲ならずとも、一時の訪問として——羅馬に來れりと然れども使徒行傳十二章十七節には只ペテロ出て他の處へ往りとあるのみ、此漠然たる記事を以て哥林多前書九の五なるパウロの詞と參照するに、是より後ペテロは一處に定住せず、使徒等の大概然りし如く諸方を遊行する傳道者の生活をなせしならんと斷定するを以て最も眞に近しとす。

十 異邦傳道の準備

異邦人の中に教會を移植したるは主としてパウロの功なりき、然れども此使徒が其高尚遠大なる傳道に着手するに先だちて、天は早くも幾歩を進めて之が爲めに途を備へたり。

(第一)彼の半異邦人たり、ユダヤ人の敵たる、サマリア人はエルサレムの七執事の一人なる傳道者ピリポの宣教とバプテスマに由り、又使徒ペテロ及びヨハネの堅振教誨に由て、感化せられたり、是に於てか福音はイエスがヤ

コブの井の傍に在てサマリヤの女と談話したまひし時(約翰福音第四章)に預言の如くに宜ひし如く、容易くサマリヤに傳はりぬ、但し此地に於て基督教は始めて異端の邪曲に陥れられんとせり、即ち彼のシモン、マガスなる偽善者聖靈を與ふるの權を金にて買んとして、嚴くペテロのために叱責せられたりき、是れを以つて西洋にては教會の職位を金銀にて賣與することを「シモン罪」と稱す、使徒中の君たるペテロと異端の巨魁シモンとの此衝突は古代の教會に於て教會の正教と欺妄の異端との關係を代表する者と見做れたり、

是より稍後卅七年と四十年の間カイザリアの百夫長コルネリヲ感化せられて基督教に入れり、彼は敬虔なる門内の改宗者なりき(本書二十三頁を見よ)ペテロは特別な默示使徒行傳第十章を見よのために、彼に割禮を受けしむる事なしに直ちにバプテスマに由て之を基督教會に列せしめたり、ペテロは此の大膽なる所爲をエルサレムに於る嚴刻なる猶太基督教徒の

前に辨明せざるを得ざりき是れ彼等は割禮を以て拯救の要件となじ、猶太教を以て基督教に入るの唯一なる路となしたればなり、斯の如くペテロは又異邦基督教會の基礎を居ゑたり、此出來事はペテロの精神上に於る一大變革の期にして是より彼は猶太教の褊狹なる僻見を脱するを得たり、

(第三)是よりも更に大切なりしは殆ど是と同時にスリアの首都アンテオケに於て基督教會の勃興したる者是なり、此教會はクプロのヘレニスト(希臘語を話する猶太人)バルナバ及びタルソのパウロ兩人の勢力に由て成りし者にして、最初より感化せられたる異邦人と猶太人とを以て成立ちしが如し、斯くアンテオケは異邦基督教の母となりしことエルサレムが猶太基督教の母となりし中心となりしが如し、亦アンテオケに於て「キリストア」とふ名稱始めて顯はれ、而して直ちに各地に採用せられたり、キリストアとは即ち其のキリスト——神にして又人たる預言者、祭司及び王なるキリスト——の門徒たること又性質と天職とを言顯はせる者なりとす、

十一 感化前の保羅

パウロの生來の準備

余輩今や異邦人の使徒を論せんとする、彼は天下一統の宗教として基督教に勝利を得せしめたり、彼は言に於ても行に於ても其同僚たる諸使徒より多く勞けり、彼は歴史上最も奇抜なる、最も勢力ある人物として超然古今に獨歩す、彼れの少時と彼れの末年とは暗暎の中に覆はれて今より其詳かなるを知る能はず、唯彼れが迫害者として起り、殉教者として終りしを知るのみ、

サウロ、即ちパウロは純粹の猶太人にして、キリストの降誕より數年の後有名なる希臘の都會、商業及び文學の隆盛なるタルソ(シシリア州に在り)に生れ、羅馬市民たるの權利を相續せり、彼はエルサレムに於てヒルレルの孫ガマリエルてふ、パリサイ博士の門に遊びて十分なるユダヤ國風の教育を受

けたり、彼は亦全く希臘の文學を窺はざる者にも非ざりき、是れ彼が文藝、辯論法、又其暗に希臘の宗教及び哲學に論及せる事、及び其時として希臘の詩を引用せる事等に徴して明かなりとす、斯の如く彼はヘブル人より生れたるヘブル人にして、腓利比書三の五を見よ、又同時に生來のヘレニスト(希臘出身の猶太人たり、且つ羅馬市民たりき、即ち彼は斯の如く其一身に古代の三大國民の資格を併合し、天下一般の使徒たるに適する一切の資格を盡く兼有せり、パリサイ人に對しては彼はベニヤミンの支派に屬する、アブラハムの子孫とし、律法の榮と推尊せられたる名聲籍々たるガマリエルの弟子をして之と辯論を上下するを得たり、希臘人に對しては彼等の美麗なる言語を以て、彼等の得意なる論法を以て之と議論を闘かはすを得たり、又羅馬民の尊榮を身に蒙むりたれば、彼は「我は羅馬市民なり」との尊大なる警語(あひことば)を以て全帝國を安泰に遊行するを得たり、

パウロが將來の事業に對する此天命的の準備は彼をして暫くの間基督

教の最も危険なる大敵たらしめたりしが、其感化の後はまだ彼をして之が最も有用なる宣布者たらしめたり、破壊の武器は轉じて建設の武器に化せり、機械は逆轉せられ、其方向は變更せられたり、然れども其機械たるや依然たる同一機械にして、却つて其力は新感動(インスピレーション)に由て倍蓰せり。

パウロの智力上道德上の稟賦は最高等に屬す、諸使徒の中學者なりし者はパウロ一人のみ、彼は其博學を銜耀せんとはせざりき、是れ彼はキリストを知るの知識に比べて之を貴ぶに足らざる者となし、キリストの爲めに萬事を捨てればなり、腓利比書三の八、九、十、哥林多前書二の二、三、然れどもパウロは之を隠すことを得ざりき、而して感化の後之(其博學を利用して道に裨益せること最も大なりき、ペテロ及びヨハネは天然の才力を有せしかども學者たるべき教育をば受しこと無りき、パウロは兩方を有せしを以て基督教哲學及び神學の創立者となりぬ、

十一 パウロの感化

パウロの感化は唯彼れ一身の史上に於て一轉機たりしのみならず、亦使徒時代の教會の史上に於る、隨て又人類の史上に於る一轉機なりとす、是れペンテコステ以來の最も結果多き出來事にして、基督教の一般の勝利を引起し來れり、

基督教の最も危険なる迫害者が最も有功なる宣布者に化したる事は、神恩の奇蹟と呼ばずして將た之を何とか謂はん、是はキリストの復活て一層大いなる奇蹟に本づけり、此二者は聯接して相離れず、復活なければ此感化は起ること能はず、又他方より觀察すれば、斯る人の感化して斯る結果を生ずるに至りし者は復活の最も確かなる明證と言はざるを得ず、

ステパノ——パウロの先驅——が彼のメッシヤを十字架にかけたる猶太教を大膽に攻撃するや、猶太の議會はイエスの教會を滅ぼしてイエスを

再び十字架につけんと断然決心して着々其事に手を下せり、此大競争に於てパリサイ宗のサウロ——年少のユダヤ博士中に在て最も剛毅にして最も剛強なる人——悦んで自ら率先者たるの地位を取れり、

ステパノの殉死及びエルサレムなる教會信徒の散亂の後、パウロは猶太議會の委任を帶て、イエスの散亂せる信徒を追ふてダマスコに進行せり、是れ基督教徒の反逆(猶太教に對する)を根絶せん爲め、男女にかゝはらず其發見し得る背信者(猶太教より見ての)を悉く捕縛してエルサレムに曳來りて祭司長より刑罰の宣告を受しめんが爲めなりき、

ダマスコは世界の最も古き大都會の一にして、アブラハムの日に既に知られたり、而して其旅行者の面前に崛起するは熾熱不毛の荒野の真中に翠綠々たる樂園を望むが如く然り、

併ながらサウロが此市府に近づくに當てや此地上の樂園よりは遙かに高大なる者彼れの爲に備へありき、即ちスリアの太陽よりも煌々たる異光

突然と日中に天より閃發し來りて彼を環照せり、時に彼が其卑賤なる弟子を窘迫しつゝあるイエス榮光に入りたるメツシヤの姿を以て光明の中に現はれ、希百來語を以て「シャウル、シャウル何ゆゑ我を窘迫や」と言たまへり、是れ叱責にして亦愛憐を兼たる疑問なりき、彼れの心之が爲めに鎔けたり、彼れ地上に仆れ臥せり、彼見たり、聞たり、慄へたり、順へたり、信せり、悦べり、彼地上より起き上りしが、誰をも見ざりき、閃々たる光耀に眼を暗まされて見るあたはず、歩行に堪へざる小兒の如く手をひかれてダマスコに入り、三日の間盲目にして食を斷ちたる後愈えてバプテスマを受けたり、此時パウロはペテロまたはヨハネの如き堂々たる使徒よりバプテスマを受けしに非ず、己れが窘迫せんとて來りし卑微たる徒弟の一人よりバプテスマを受けたり、傲慢にして自ら義とし、無容忍にして殘暴なるパリサイ人今や豹變して謙遜なる、悔恨する、感恩の情に堪ざる、イエスを愛するに切なる、忠僕とは成りぬ、彼は自ら見て義とするの驕心を去り、學識、勢力、權威、及び前途の好望

を捨て、己れの生命を懸けて彼の少数なる輕蔑せらるゝ宗派と禍福を共にせり、古來若し正實無私にして根本より有功に其信仰と舉動を改めたる者ありとせば、タルソのサウロこそ即ち其人なれ、彼は聖靈の創造力に由て、キリスト、イエスに在て新たに造られたる者となれり、(哥林多後書五章十七節 加拉太書六章十五節を見よ)

十三 パウロの事業

今茲にパウロが傳道の精神及び方略を一瞥せん、パウロを感服せし者はキリストと一切の人とに對する愛なり、彼曰く、キリストの愛われらるを勉ませり、我儕思ふは一人衆の人に代りて死たれば衆の人すでに死たる也、其の衆の人に代りて死しは生る者をして以後のお爲がならで己れに代りて死に懸へりし者のために世を過さしめんとて也、彼は自ら己れをキリストの奴僕と見做し、又すべての人に神に復和せんことを求むる使者(キリスト)

と見做せり、此精神に屬まされて彼はユダヤ人にはユダヤ人の如くなれり、異邦人には異邦人の如くなれり、又すべての人には衆の人の狀に循へり、是れ如何にもして數人を救はん爲なりき、

彼はスリアの首府たり、又異邦基督教の根本教會たるアンテオケを以て其傳道施行の出發點となし、又歸着點となせり、而して又猶太基督教の根本教會たるエルサレムと聯絡を通せり、キリストの獨立なる使徒なりしかどもパウロは其第一の傳道に出るに當りてや、アンテオケより嚴かなる委任を受領せり、彼は歴史商業及び開化の潮流に追隨し、東より西に、亞細亞より歐羅巴に、スリアより小亞細亞に、ギリシヤに、多分イスパニアにまで到れり、廣大なる而して又勢力ある都會アンテオケ、エペン、コリント、ロマ等には殊に長く滞留せり、是等の本陣より彼は其弟子及び同勞者を以て福音を其周邊の町村に傳播せり、然れどもパウロは常に他の使徒と衝突することを避け、キリストの未だ宣傳へられざる新地方を求めたり、是れ他人の置きたる

基礎に建ざらんが爲なりき、是れ眞箇の獨立にして、又傳道上の禮法なりとす、然れども基督教に對する熱心よりは自宗に對する熱心熾んなる傳道會社は時に或は此禮法を破りて他の傳道會社の領分を侵害す、浩歎にたふべけんや、

アナニアを以て傳へられしキリストの使命——「汝は異邦人および王とイスラエルの子孫の前に我が名を擔はん」——に循ひて、パウロの主たる傳道は異邦人(猶太人をも含著して)にむかひてなりきユダヤ人は福音を先きに聽くの權利あるが故に羅馬書一の十六又異教國の都會にありし猶太教の會堂(シナゴグ)は基督教の傳道者の爲に先驅たりしが故に、パウロは自然に猶太人と改宗者とにむかひて説教を試み、舊約聖書の本文を引きて其事がナザレのイエスに於て應驗したることを證明するを事とせり、但し彼は大抵一般に半猶太人、即ち門内の改宗者(二十三頁を見よ)が己れの兄弟よりも心開けて福音を受けるに敏なるを發見せり、彼等は正直にして熱心に眞宗

教を求むる者にして、純然たる異教徒に移るの端と成り、パウロの教會(會衆)の中心となれり、蓋し彼等は兩宗教よりの改宗者を以て成立ちたりしなり、彼がユダヤ人より異教人より、偽りの兄弟より蒙りたる無数の困難、危殆及び苦痛は殆んど想像するに餘あり、使徒行傳は只是れ略記に過ぎざるのみ、彼は時に或は自ら之を補ふ、云く、

「われは五次ユダヤ人に四十に一を減じたる鞭を受け、三たび條にて撲れ、一次石にて撃れ、三たび破船にあひ、一晝夜海にあり、又しばしば旅路を經、かつ河の難、盜賊の難、同族の難、異邦人の難、城裏の難、野の中の難、海中の難、偽の兄弟の中の難に遭り、また彼等に愈りて勞苦つかれ、屢々寢す、飢渴しばしば食を絶ち、凍裸なりし也、此に言ざる外の事ありて日々我に迫る、即ち諸の教會の憂慮なり、誰か弱りて我弱らざんや、誰か礙きて我が心熱せざらんや、(哥林多後書十一の二十四——二十九)」

斯の如く紀元五十七年に彼は己れの讒毀者に對して辨護せんために心

ならずも書て示せり、實に是れ彼がカイザリアと羅馬の牢獄に於て最も長き最も苦しき試練に遭ふの前、即ち少くとも其殉教の七年前なりき、彼は四方より患難を受けども窮せず、詮方つくれども望を失はず、迫害るれども棄られず、跌倒るれども亡びざりき、哥林多後書四の八、九、彼れが公生涯は始終戦闘の断え間なかりき、彼は肉慾及び悪魔と戦ふ此世の教會所謂テヨルチ、ミリタント、即ち駭々と歩を進めて仇敵を克服する基督教を代表す、

十四 バウロの傳道事業

パウロの公生活(傳道に従事せし歲月)は其感化の後三年めより其殉教まで、即ち紀元後四十年より六十四年まで凡そ一世紀の四分の一を包括す、其間に三大傳道の出陣並に若干の小遠征あり、又エルサレムを訪問せしこと五回、カイザリア及び羅馬に囚はれたること少くとも四年なり、或人はパウロの公生活を六十七年若くは六十八年までに延ばすなり、按ずるにパウロ

の公生活は五若くは六時期に區分せらるべし、即ち左の如し

第一、紀元四十年——四十四年、スリア及び其生地キリキアに於る準備傳道の時期、此時パウロは半は獨にて、半は其長者たるバルナバ(パウロと共に異邦人の中に斯道の使徒たりし者)と偕にありて働らけり、

パウロ其アラビアの退去地(加拉太書一章十七、十八節)より歸るに及びてダマスコに於て公然と傳道の業に従事し、其感化せられ召喚せられたる地に於て頓てキリストを宣傳しつゝありき、茲にパウロの傳道は大いにユダヤ人の忿怒を惹起したりしかば、彼等(エゲヤ人)はアラビア王の代官を僉憑して之を殺さしめんと試みたり、使徒行傳九の二十三より二十五、哥林多後書十一の三十二、三、然れどもパウロは將來に有用の人物とならんが爲に此危難を救はれ、籠に入りて窓より該府の石垣にそふて、續下され去りぬ、其感化の後三年にしてパウロはペテロを見んためにエルサレムに上り、彼とともに二週日を費やせり、亦ペテロの外に主の兄弟ヤコブをも見たり、此時

ルナバパウロを衆弟子に紹介せり、彼等は初めパウロを怖れをりしが、其驚くべき感化の話を聴くに及び、嘗て其信仰の道を滅ぼさんと務めたりし迫害者が今其道を宣べつゝあるを見て、神を崇めたり、

パウロがエルサレムの聖殿に於て主より速かに異邦人に到れとの特命を幻に得たるは恐くは此上京の時にありしならん、パウロ若し長く此サンヒドリム(猶太議會)の所在地に留まりたらんには、必ず彼の殉教者ステパノと運命を同うするに至りしならん、

パウロは羅馬帝クラウデオの治世に於る饑饉の際、即ち紀元四十四年にユダヤの兄弟を救恤するために、アンテオケの基督教徒の議捐金を携へてバルナバと偕に再びエルサレムに上れり、使徒行傳十一の二十八、三十、三十二の二十五、彼の時にはヤコブは首を刎ねられ、ペテロは獄に投せられ、迫害甚だ熾んなりしに因て、パウロ恐らくは使徒には一人にも遇はで歸りしならん、是等の四年は大概タルソとアンテオケに於る傳道事業の爲めに費され

たり、

第二紀元後四十五年——五十年、第一の傳道旅行、四十五年パウロはアンテラケの教會内の預言者によつて傳へられし聖靈の指揮を奉じて、バルナバとマルコを伴ひて、其第一の大傳道旅行に出發せり、此時彼はクプロの島を遊行し、又小亞細亞の諸地方を徧歴せり、此旅行中の重なる出來事は使徒行傳第十三、十四の兩章に詳かなり、

此時期は五十年にエルサレムに開かれたる重要なる使徒會議を以て局を結べり、

第三紀元後五十一年——五十四年、第二の傳道旅行、エルサレムの會議に於て教會内の猶太分子と異邦分子との想違(衝突)を一時調停したる後パウロは五十一年に第二の大傳道旅行をなせり、此傳道旅行に由て、希臘國は翁然として基督教に向ふに至れり、此度の旅行にはパウロシラスを伴なへり、先づ其舊教會を歴問せし後、彼は進んでシラスと新歸教者テモテの幫助を

以て、ブルギア及びガラテアの各地方に新教會を設立せり、此に彼は其體の病患に腦みしにも拘はらず、天使の如き者として衆人に款待せられたり、茲にパウロはマケドニア(マセトニア)人が涉りて我儕を助けよと言ふを幻に見て、トロアスよりギリシヤに涉れり、彼第一にはピリピに福音を宣て大いなる出来榮を得たり、即ち彼は此にて紫商ルデア及び監獄官を感化せり、此際彼はシラスと共に獄に投せられしかども、不思議に免かれ、恭しく釋き放たれ去りぬ、第二にパウロはテサロニケに福音を傳へたり、時にユダヤ人彼を窘迫したれども、此傳道の功果として盛んなる教會此に起れり、次にペレアに到りて道を傳へしに、感化せらし者多くして熱心に聖書を研究せりと云ふ、希臘文學の首府アテンスに於てはパウロストイク派及びエピキユリアン派の哲學者と論じ、アレヲバグスに於て絶妙の機敏と智慧とを以て彼等に其知ざる神及びイエス、キリストを示せり、此彼等が知ざる神即ち獨一無二の眞神をば彼等有りと有らゆる神々をひとりも疎そかにせじと

の迷信を以て知らざる神にこの祭壇を築きて、知す識す崇拜しをりしなり、最後に、コリント——東西貿易の橋梁たり、富財と文明の盛隆なる中心たり、然ながら亦悪俗腐敗の府たりし大都會——に於てはパウロ十八ヶ月を費やし殆んど如何ともし難かりし困難の下に在て遂に一教會を此に設立せり、此教會は即ち福音の感化の下に在て希臘人の一切の善徳と一切の惡徳とを顯はしたりき、パウロの最も大切なる書翰の中二通は此教會に與へし者なりき、

五十四年の春パウロはエペソ、カイザリア及びエルサレムを経てアンテヲケに還りぬ、

此時期に彼れ帖撒路尼迦前後書を作れり、是れ今日に存するパウロの書翰中最も早く作られし者なり、使徒行傳中に保存せられたるパウロの演説を除けば、

第四紀元後五十四年——五十八年、第三の傳道旅行、五十四年の末にバ

ウロはエベンに住き、此の代理コンスル官を以て統轄せる亞細亞の首府たり、又ダイアナ女神の禮拜の中心たりしエベンに三年が間其傳道の本部を設備せり、斯て後パウロは再びマゲドニアとアカヤの諸教會を訪ひ、尙もコリント及び其近傍に三ヶ月をおくれり、

此時期に彼は加拉太書、哥林多書及び羅馬書の四大教理書を作れり、是れパウロの活動と有用の如何に大なりしかを示す者なりとす、

第五紀元後五十八年——六十三年 再禁監の時期(此兩禁監にカイザリアよりローマに至りし冬季の航海おこれり、五十八年の春パウロはピリピ、トロアス、ミレトス、ツロ、及びカイザリアを経て、エルサレムに至れり、是れ第五にして最後の旅なりき、其目的は再び希臘の基督教徒の義捐金をユダヤの貧しき兄弟におくり、斯くして使徒教會内に於る是等二派の信徒(ニグヤ人と異邦人間の隔意を除きて之を益々鞏く結合せんが爲めなりしなり、然るにパウロを背信者、猶太教に對する)とし、人民を煽惑する者として痛

く之を惡める或る狂妄の猶太人等はペンテコステの日に於てパウロに反對して騷擾を起し、彼が無割禮の希臘人トロピモを宮につれいりし事ありとて、宮を汚せしと彼を罵り、恐らくは血を以て宮を汚がすに至らんとて彼(パウロ)を宮より曳出せり、パウロ時に潔禮の爲め宮の中に在し故に、若し其近處に住をりし羅馬の千夫長クラウデア、ルシアステ、ふ者兵隊を率ゐて直ちに其場に奔せつけざりしならば、彼等かならずパウロを殺せしならん、此千夫長パウロが羅馬市民なるを重んじて之を暴徒の虎口より救ひ出し、翌日彼之をサンヒドロムの前に立たしめたり、然れども該議會も徒らに紛雜して審問の効なく、且つ彼を密かに刺んとの隠謀露見したれば、千夫長は堅固なる護衛と無罪の證狀とを添へて彼をカイザリアなる方伯ペリクスの許におくり遣りぬ、

此(カイザリア)にパウロはサンヒドロムの前に審問せられん事を待つ、未決囚として全二箇年獄裏に在り、時に或はペリクスの前に事情を陳辯し

或は基督教徒の訪問を受けなごして、割合には緩待せられ、我等が知ざる或方法を以て神の國を廣めつゝありき、

茲に新任の良方伯ベストス紀元後六十年にペリクスに代りて職に就くに及びて、パウロは羅馬市民としてカイザル(羅馬帝)に上告せんと決す、是實に天下の救主を天下の首府に宣傳へんとの彼が宿願の爲に、路を開く者なりき、最後に今一たびベストスとヘロデ、アグリッパ王(ヘロデの最後なる者)と其妹ベルニゲ、並にカイザリアの最も尊き人々の前に、己れの無罪を證明し且キリストの爲に絶妙なる一場の辯護説を演べて後、六十年の秋羅馬帝の許へ護送せらる、彼れ海上に於て暴風に遇ひ、終に船を破りてマルタの島に冬を過せり、此航海はルカ其目撃者として奇特にも精密に之を描寫せり、六十一年の三月數名の忠信なる隨伴とともに羅馬府に達せり、パウロの身は實にキリストの囚人なりき、然れども其自由なること、其勢力ありし事は玉座にありし皇帝よりも大いなりき、是實にニロ帝の第七年なりき、

羅馬に於てパウロは六十三年の春まで二年間寛容なる禁監を受けをり、其借受し家に於て其朋友及び同勞者に圍繞せられて、其上告の裁決を待つゝありき、彼は己れを守る近衛兵に福音を宣べきかせたり、小亞細亞及び希臘に在る諸教會に書翰及び使者をおくれり、諸教會の行爲を監督せり、而して斯く縲綏の中に於て其使徒たるの忠節を主と其教會に完たうせり、使徒行傳二十八章三十一二節を見よ、

第六、紀元後六十三年、六十四年、パウロの羅馬禁監の第二年に及ぶやルカは寧ろ突如として筆を絶てり、パウロが羅馬に到着したるは基督教の勝利を將來に必せる者なりき、

但し六十三年の春此二年の終りし後パウロは如何になりしか、斯く長びきたる審問の結果は如何なりしか、彼は死刑を宣告せられしや、或はニロ帝の法庭彼を放免して、再び若干年間道を傳ふることを得せしめや、此の疑問は學者の間に尙決せざる所なり、

彼若し放免せられたりしならば、其放免の時は六十四年の七月の大迫害の前なりしならざる可らず、是彼の迫害は基督教の此大先導者を無事には活し置かざりしなる可ければなり、パウロの禁監の第二年の末つ方有名な猶太の歴史家ジョセフアス(時に年二十七歳風波の難を冒して羅馬に來り、ポツピーア(ニロ帝の後にして半ば猶太教に化したる婦人)の勢力を借り、若干の猶太祭司——即ちペリクシスが罪囚として羅馬におくりし祭司——等の放免を請得たり、亦奇遇と謂ふべし、此時に當りてパウロも亦此一般の猶太俘囚放免の恩典に預りたらんも知る可らず、

ニロ帝の世にパウロが殉教の死 遂げたる事は古傳説の一般に證定する所なり、彼は羅馬市民なりしを以て、ペテロの如く磔刑には處せられざりしと雖も、劍を以て斬殺せられたりと傳へ云ふ、其殉教の刑場は羅馬を距ること三哩ばかりなりしと、而してパウロの命日はペテロの命日と同じく六月廿九日と卅日に記念せらる、彼が死亡の年につきては其說紀元後六十四年

より六十九年までに入出入して一定せず、パウロが殉教の處と方法とのペテロに異なるに因て考ふるに、彼はバチカン岡に於て基督教徒虐殺の慘劇ありし少し前に或は是よりも一二年後に、常式の審問を経て、死刑に定められしならんと思はる、此二説の中後者を以て一層實に近しとす、如何となれば彼の大殺戮に於てはパウロの有せる羅馬市民權も亦顧りみらるゝこと無かりしなる可ればなり、

十五 猶太人の叛亂、羅馬人の來征

紀元後六十六年の五月猶太人兵を擧て羅馬人に叛けり、ニロ帝此叛逆の報知を得るや、其最も名高き將軍ベスパーシヤンをして大軍を率ゐてパルスタインに臨ましむ、ベスパーシヤンは六十七年に戦端を開き、手強き抵抗に遭ひしにも拘はらず、六萬の兵を以てガリラヤを縦横に驅かあらせり、然れども羅馬に異變ありしを以て、彼は其勝利を全うせずして、彼處かに歸れり、是れ

ニロ帝自殺をなせしに因てなり、六十九年ベスパーシヤンは衆望に由て帝位を嗣ぎ、羅馬の爲に秩序と繁榮を恢復せり、

ベスパーシヤンの子タイタス彼は十年後に羅馬帝となり、其寛厚と仁慈を以て秀でたり、時に猶太征討軍の大將として來り、神の手に在て此の聖城(エルサレム)と聖殿を滅ぼすの器械となりぬ、彼は八萬に下らざる大兵を有し、其陣營をスコパス山及び之に接近せる橄欖山にするて、都城と聖殿とを眼下に見くたせり、圍める者と圍まれる者との間にはケデロンの谷横たはりて經界をなせり、

紀元後七十年四月踰越節の終りて間も無く、他邦人エルサレムに充滿しをる時に、此圍は始められ、タイタス頻りに降服を彼等に勸めたれども、シヨセフアス(時にタイタスの通辯とし仲裁人として伴なへり)屢々懇求したれども、熱心者輩は傲然として之を斥け、剩さへ降服を言ふ人をば盡く斬棄てたり、然のみならず彼等は屢々突進してケデロンの谷を下り山に上りて羅

馬人を襲ひて、大いなる殺傷を之に蒙むらせたり、彼等は困難の増すに隨ひて、愈々勇氣を増し來れり、幾百の俘囚を一日に五百人ほどまですらも十字架に磔殺せしが如きは唯に彼等の忿怒をますのみなりき、否な城中食乏しくなりて、日に餓死する者幾千なるを知らずして或る婦人の如きは其赤子を煮て食ふの勢なるにも拘はらず、又母親嬰兒飢に啼く聲四邊に響くと雖も、猖狂の熱心者は毫も之に心を動かさず、頑然として屈せざること鐵石の如くなりき、古來歴史上斯る頑固なる抵抗斯く必死に勇奮して、毫も死を懼れざる者は、未だ曾て有らざる所なり、猶太人は唯に其政治上自由、生命、及び其祖國のために戦ひしのみならず又其の國民たる尊榮を形くりし者——即ち其宗教——のために戦ひしなり、此宗教は墮落を極めたり此の有様に於ても、尙殆んど人力には非るべき忍耐力を彼等の心中に注入せり、

耶路撒冷の滅亡が基督教會に及ぼせし影響

エルサレムの基督教徒は主イエスの警戒をおぼえて、早くも該府を去り

ペレアの北に於て、ヨルダン河のかなたなるデオポリスのペルラテふ町に逃げゆけり、此にヘロデアグリッパ王第二世(嘗てパウロが其前に立し者彼等の爲に安全の逃避所を開けり、古傳に云ふ、當時神の聲または天使ありて基督教徒中の領袖にエルサレムを脱逃すべき事を示せりと、彼處に於て、重に異邦人なる人口の中に在て、割禮者猶太人の教會は再建せられたり、不幸にして其歴史は今日に傳はらざるなり、兎まれ角まれ猶太人の基督教會は終に其以前の勢力を挽回し得ざりしなり、エルサレムが基督教を奉ずる市府として再興せし時に、其監督(僧正)は東部の四族長の一たる品級に上げられたり、然れども是只名譽上の族長にして、權力の之に伴なふ無かりし、而してマホメット教徒の侵略以來全く有無の間に沈没し了りぬ、

猶太神政の滅亡の如き大災は基督教徒の中に最も深大なる感覺を起せしや疑なし、是れは猶太教の大災にして、基督教の大利なりき、前者の駁倒にして、後者の辯明なりき、一は失意にして、一は得意なりき、是只一大刺激を信

仰に興へしのみならず、同時に又是等二宗教社會の間に於ける關係の歴史上に一紀元を作りしなり、是れば是等兩者を永久に分割せり、是より後異教人民は基督教を以て唯猶太教中の一宗派と見做す能はず、今や之を一種特別なる新宗派と見做さざるを得ず、是故にエルサレムの滅亡は即ち基督教會が猶太教でふ蛹の中より永久に跳脱し、自ら成人の念を起し來り、其治りと禮拜とに於て忽然世間に獨立せし最重最要の時機なりしなり、

十六 トレージャン帝の治世

羅馬の英主と稱せられしトレージャン帝位に即けるや激烈なる迫害及び若干の殉教は其治下に起りぬ、

但しトレージャンの世に於る殉教にして至當に最も名高かりし者は聖イグナチウスの殉教なりき、是實に古代の教會史中最も著明なりし事件

の一なりとす而して、其然る所以は嘗に其事自身のためのみならず、此老尊
 監督エピスコポスの名を負へる數通の書翰に伴ふ關心の大なるあるに因てなり、イグナ
 チウスはヨハネの弟子たり、ポリカルプの友たる者にして、スリアのア
 オケエピスコポスの監督たりき、當時市府には二十萬の人口ありき、使徒等の殉教の後に
 在ては殉教の中に神の力めぐみと恩との顯はれて、禍を轉じて福となし、神の僕
 もをして其衆敵に勝つことを得せしめ、神の榮光と教會の榮光とを進む
 を得せしめしは此殉教を以て最も著明なりとす、

此殉教の年は疑はし、然れども畢竟是れ紀元百十五年の末なりしと云ふ
 説最も實に近きに似たり、百十四年トロージャン帝のダシア遠征を記念す
 る爲めにトローヂヤン柱と稱する者羅馬に立てられたる後帝は東方に向
 ひて出發し、其秋アテンスとセリウシアを経てアンテオケに達し、此にて冬
 を過せり、

百十五年の早春帝バルテア遠征の準備をなしつゝ、尙此に在りしに、大地

震起りてスリアの此市府と其他の諸處を大いに破壊し、且帝の生命をも危
 うせり、コンスルベドは此に斃れたり、此天災は人民を刺激して基督教徒を
 惜ましめたるならん、是れ彼等は此の如き災害を以て基督教徒の所爲に歸
 したればなり、

アンテオケはキリストの信者が始てキリストアン(基督教徒)と稱へられ
 し處なれば、使徒行傳十一の二十六、此には必ず暗黒の権力と基督教會の間
 に長き烈き争ありしならん、異教の諸殿堂、神宮の神官及び信徒並に凡て夫
 の絶大なる異教系と關係を有せる人々は、帝が其府に營を駐めをらるゝを
 幸ひとして、基督教を殲滅せんと務めたるなるべし、彼等は謂へらく、教會の
 監督イグナチウスにして死刑に處せられたらんには、教會自身も萎靡して
 振はざるに至るべしと、

イグナチウスは帝の前に曳出されて帝に訊問せられたり、帝曰く、「此の惡
 鬼につかれたる者、敢て朕が命令を破り、又他人を勸めて同じく之を破らし

めんとする者、是れ何んぞや、イグナチウス答へて曰く、「テオフォルス神を其
裏に宿す者を悪鬼と呼ぶ者なし、悪鬼は神の僕たる人々より遠く離れ去れ
り、我はキリストを我が天上の王として戴へに因りて悪鬼の攻撃をば之を
逐ひ退ぞく」トレージャン問て曰く、「テオフォルスとは何人ぞや」イグナチウ
ス答らく、「キリストを其胸中にやどす者はなり」帝曰く「我等は神々を我等の
同盟者として敵にむかひて之を用ふる者なれば、我等も亦神々を心中に置
く者なるに非ずや、汝は然か思はざるか」イグナチウス曰く、「異教の鬼神を彼
の名を以て稱へらるゝは誤れり、宇宙には只一神あり、即ち天地と海と其中
の萬物を造りたまひし者はなり、只一キリストイエスあり、即ち神の獨子に
まします者はなり、願くは我彼れの國を享受を得んことを」帝問らく、「汝は彼
のポンテヲ、ピラトの下にて十字架にかけられし者を指て謂ふなるか」イグ
ナチウス曰く、「然り、我は彼を指て謂ふなり、彼は我罪と其罪の作者とを十字
架にかけ、且諸の悪鬼の迷妄及び害悪を排斥し、己れを其胸中にやどす人々

をして悪鬼を足下に踏しめんとす」帝曰く、「然らば汝は夫の十字架にかけら
れし者を汝の中にやどすといふや」答て曰く、「然り、如何となれば我かれの心
にやどり彼我の中に歩まんと記されたればなり」
是に於しトレージャンは宣告を興へて曰く、「イグナチウスは夫の十字架
にかゝりし者を其身にやどすと云ふに因て、朕は命す、兵卒をして彼を囚人
として大羅馬に曳ゆかしめ、之を猛獸に投與へて人民の娛樂に供すべし」
時に殉教者イグナチウス喜色滿面に溢れて大聲に呼りて曰く、「嗚呼主よ
爾は我を爾に對する圓滿の愛を以て崇めらるゝに足る者となしたまへり
爾は我を鐵の鏈にて爾の使徒聖パウロに連らしめんとしたまふ、故に我は
爾に感謝したてまつる」斯て彼は先づ教會の爲に祈りて、涙を以て之を主
に薦め、其鏈をとりて自ら之を己れの體にめぐらせり、彼は十人の兵卒に托
せられしが、彼等は嚴刻に彼を待へり、兵卒等彼をセリウシヤに曳き、其處よ
り海に由てスムルナに至れり、此にて彼は監督ポリカルプ——彼と同じく

聖ヨハネの弟子にして、同じく福音の爲に殉すべきに定まれる者——に迎へられたり、是より先イグナチウスが宣告を受たる事及び其將にスムルナを経て行んとする事の報道己に亞細亞の諸教會に達したれば、是れ等の中の數教會より監督及び教師に總代としてスムルナに派遣し、基督教徒たるの慰藉を以て、彼と相連ならんことを望み、或は又彼より或靈なる賜物を得んことを望めり、イグナチウスはエペソ、マグネシア及びトラレスの監督に是等の各教會に與ふる書を托せり、又エペソ教會の或る會員はイグナチウスが取るべかりし道よりは一層捷直の路に由て羅馬に進まんとしつゝありし故に、彼は彼等の手に由て預め羅馬なる己れの兄弟に書をおくるの便を得たり、トロアスに於て彼は、ヒラデルヒアの監督に出で逢はれ、此よりして該教會に書を贈り、又スムルナ人及び其監督ボカルブにも書をおくれり、斯の如くイグナチウスの旅行は即ち諸教會に對する基督教傳道にして福音の廣布に與りて大いに力ありき、人々が彼を見んため、彼に敬禮を表せん

ため、又彼と會ひて宗教上の利益を得んために、四方より輻輳し來りしこと中々盛んにして、異教人の中にさへも一方ならぬ注意を惹き起したりと見ゆ、

彼れ羅馬の港に上陸せるや、兵卒は彼を投すべき遊戯の早くも終を告んことを恐れて、只管彼をせきたて、都府に進めり、途に於て羅馬府より出迎へる兄弟に遇ひしが、イグナチウスは其書翰に書きたるよりも一層切に彼等に請ふに決して彼れイグナチウス自身の命をたすげん事に力を盡すなからんことを以てせり、而して彼等とともに教會の平安を祈り、忠信なる人々の中に愛の永く存せんことを願て後、彼は大圓戲場に携へられ、其處にて今や遊戯の終らんとする時に帝の命のまゝに猛獸に投與へられたり、此日は大祝日にして、人民先を争ふて此大圓戲場につめかけしなり、猛獸は頓て之を牙爪にかけて寸裂し、殉教者の四肢五體は全く噬はれて、只二三の大さなる骨をのこせしのみ、イグナチウスの弟子たち其骨を拾ひあつめ、恭し

く之をアンテオケに携へて教會の中に藏めたり、

イグナチウスが殉教の死をどげし羅馬の大圓劇場(大部分は今に尙存す)は即ち夫のコロッセウム(偉大觀の義なりき、之を然か名けたるはニロの巨大なる像の立ちぬたるが故なり、是れベスパーシアン帝が工を起し、其子タ

イタスが之を完うして紀元八十年に落成したる者なりき、

彼の太圓劇場の柵内に於て、聖イグナチウスは、異教の爲に辱かしめられんとてアンテオケより羅馬に曳かれ、神の恩に由て與へらるゝ神聖なる勇氣を充し、泰然自若として己れに嗔りかゝる猛獸を引受たり、而して彼の八萬人を容るゝ非常なる建物の中に在て彼は基督教の爲めに永久不磨の説教をなしたり、

コロッセウムの西に當りて少しく隔りて、第一の基督教帝コンスタンチンの勝軍門屹立す、是れアンテオケの監督たり殉教者たる聖イグナチウスの苦難の如き者が世界の歴史上生じたる結果の見證者たるなり、

十七 ハドリアン帝の治世

「迫害の時代」てふ名は基督紀元に於る最初の三世紀に與へらるゝと雖も、此間斷なく羅馬帝國の全體に於て基督教會が迫害せられたりといふに非ず基督教徒は何れの州に於ても、何時にても寤めらるゝ事なきを保ちがたかりし、然れども彼等に對せる迫害は發作の常なき間歇的の者なりしなり、時としては私怨ある者其敵とする人を除かんとして口を其人の基督教者たるに藉るあり、時としては或人其忿を洩さんが爲に一箇の基督教徒に法律の攻撃を向くるありき、

ハドリアン百十七年八月トレイジャンに繼で帝位に登れり、此新帝は有爲にして氣力あり、聰明にして變化百出せしと雖も、亦志操常なく、行動奇逆にして、始終安する所なき虚榮の餓鬼なりしかば、基督教の眞價を玩味せんことは到底彼は望む可らざりき、然れども彼を教會の迫害者の中に列する

は全く正しからず、如何となれば彼が在位の間に起りし迫害の中一として彼が親ら關はりし者は無ればなり、然のみならず、彼が治下に在て基督教徒の境遇は大いに善きに改まりたりしなり、

前の章に於て見たるが如くトレージャンがフリーに與へたる訓令は、善き方もあり、又惡き方もありき、即ち是は無名及び誣妄の告發を斥くことにも、亦福音を信奉する事を以て服罪の上刑罰すべき罪と明かに定められたるなり、但し基督教徒は此無名の告發を受理せざるてふ箇條より望み得たれば保護をも直ちに奪はるゝが如き境遇に陥りぬ、彼等は最早箇々の告發人に襲はるゝこと無しし、然ども祭日に於て時として人民起りたちて、彼等を攻たり、若し何にもあれ失敗するあれば、例へば凶作若くは敗軍等の失敗あれば、迷信の愚民は常に之を諸神の震怒に歸する事を猶豫せず、基督教徒は諸神を禮拜せざる不敬の徒なるが故に諸神之を怒りたまふなりと言ひて、之を殺さんことを要むる聲囂々たり、テルタリアン曰く、若しテベル河盜

るれば、人々は基督教徒を獅子に投げよと叫ばり、饑饉若くは疫病ありて羅馬を脅かせば、基督教徒を獅子に投與へよと叫ばれり、此の人民の呼號は一見して想像するよりは遙かに危険なる者なりき、人民が祝祭にあたりて大圓劇場(アンヒセーアトル)に集りて、随分の一致を以て何事にも要求するあれば、其事は人民の意志の發表せる者と見做れたり、是れ羅馬に於て輿論を發表する方法たりしなり、而して官吏は舊慣に依て斯る輿論を敬重せざる可らざりき、何人にも此集會の中に於て基督教徒を獅子に投よと叫ばるを得べし、若し其呼號をして賛成せられ、一般の喝采となるに至らば、是れ頓て強暴の所爲を施すに十分なる理由なりき、官吏は直ちに基督教團體中の重なる會員を捕へんために人を派せん、彼等もし直に看出されなば、大圓劇場内なる官吏の席前に曳かれん、而して彼等もし帝の像と諸神とを祭祀することを拒まば、其柵内に投せられ、猛獸の爪牙にかけられて、其遊戯の大圓とせられたり、官吏は勿論其舉動まぢまぢなりし、或者は人民の喧囂に

雙耳を向けて、其場内を動かすをも顧みざりし、或者は少しにても人民の中に斯る事を望むの聲あらはるれば、之を口實として基督教徒を虐遇したりき、寛仁なる知事は告發人を斥ぞけ、又時としては被告發人のために例規の吟味を避るの道を與へたり、然れども不良殘忍なる知事は其基督教徒を生殺するの權を妄用して己れの貪慾を満すの具となしたりと云ふ

一時ドリアン帝アテンスに到るや該府の異教徒は其基督教徒に對する平生の憎念を満足せしめんとの望をおこせり、是時に當りて二人の基督教徒——一人はクワドラトスと曰ひて傳道者たり、一人はアリスチデスと曰ひて感化せられし哲學者なりき——各々護教の議論を草して之を帝に上つれり、是等の護教論(アポロジ)は嘉納せられたるが如し、是即ち夫の異教の弊風及び妄誕に對比して基督教の眞理を有力に有功に表明せし若干の護教論の第一なる者なりき、

其頃或る異教官吏上疏して公義と容忍との爲めに論ずる所ありき、即ち

亞細亞の代官セレンニウス、グラニアヌス將に其職を退かんとするに當りて、從來各處に於て人民の喧囂に應じて基督教徒を虐遇するの殘忍非道なるをハドリアン帝に上申せり、是に於て帝はグラニアヌスの相續者及び他の地方官に訓令を發せり、即ち命じて曰く、最早人民の喧囂を容れて基督教徒を虐ぐべからず、彼等もし犯せる所あらば、其經重に循ひて之を處罰すべし、必らず法律の手續を履むべし、而して原告者をば嚴罰すべし、此訓令は新形の迫害より基督教徒を保護する者として價ありし、然れども是尙完全なる容忍を與へたる者とは決して言ふ能はざりき、是此訓令は基督教自身が罪惡なるや否やを明言せずして、其判斷をば全く地方官の認定に一任したるが故なり、然しながら畢竟ハドリアン帝及び其相續者アントニアス、バイアスの長き安らげき治世は、基督教に利なりしなり、此間に基督教は速かに其信徒の數を増しつゝありて、益々世間に勢力ある地位を占るに至りぬ、哲學者輩は基督教に加はり來れり、其信奉者は最早公然として毫も隱す所な

かりき、其教師は廣く人に知られたり、其護教論(アポロジ)なる者は最早唯に
 偏僻と誤解に對して基督教を辨護するに止まらず、今は敢然自ら進んで國
 教たる多神教の愚妄及び弊惡を攻撃するに至れり、ハドリアン帝の治世
 猶太人の爲には甚だ禍なりき、トレーシヤンの末年に種々の地方に於て猶
 太人の反亂ありき、是等の反亂は皆嚴酷に鎮壓せられて、猶太人民一般は之
 が爲に益々壓制を蒙るに至れり、之が爲め、又殊にはハドリアンが聖城の
 跡に羅馬の民を植ゑて彼れ等の宗教を辱かしたるに因り(一百三十二年
 一百三十五年、パレストアインの猶太人は憤激して怖ろしき反亂を興し、バル
 コカブと稱する人を大將として羅馬に抵抗せり、バルコカブとは即ち(星子)
 の義にして、其徒に彼をメツシヤと信じたり、激戰長日の後此叛亂は戡定せ
 られたり、猶太人の中殺されし多かりき、又或者は馬の價を以て賣られ、或者
 は其本國より他へ移されたり、而してユダヤ人は只だ一年に一度の外はエ
 ルサレムに立よることを許されざりき、其一年一回の日は即ちタイタスが

該城を陥れたる日期にして、此日には彼等多額の金を出して、其舊築煉の
 跡に登覽することを許されたり、純然たる一箇の羅馬市エルサレムの舊址
 に建られたり、シオン山はジュピテル神の宮のために汚されたり、猶イエス
 の誕生、磔死及び埋葬を以て神聖となりし土地も同様に汚されたりと
 云ふ、

彼の反亂の尙盛んなりし間には基督教徒はバルコカブをメツシヤと認
 むることを拒みしが爲に大いに苦しめられたり、其鎮定の後ハドリアンの
 處置はエルサレムの教會内に重大なる變更を引起すに至れり、猶太人より
 外見上分離せんことを欲して、エルサレムの教會の會員の多數は其此時ま
 で保ち來りし摩西モーセの例規を棄て、而して茲に始めて異邦人種ヘテロネーションの監督を撰び
 異邦教會の慣行を採用したればなり、

十八 コンスタンタイン大帝

テラタリアン謂へらく、羅馬帝にして自ら基督教徒たらんことは自家矛盾にして、到底有り得ざる事なりと、然れども此事今將に實際に起らんとす。コンスタンタインは多分其父の信せし所に循ひて薰陶せられしならん其父の信せし所は唯一の主宰神を信するに本きたる折衷教なりしと見ゆ彼れ幼なりし時ダイオクリシヤンとガレリウスの宮廷に人質として數年を費やせり、斯く留められてありし間に彼は異教の僧徒が帝の心を動かさんとして譎詐の手段を用ひたりしを看破するの機會を得たるならん、彼はユメデアにて迫害の勅令の發布せられ、而して慘狀の次で起りしを目撃したり、布烈巔屯在の軍旅が彼を奉じて其父帝の後任者と仰ぐに至りて、彼は父君コンスタンチアスが己に基督教に與へたりし容忍を尋ぎ且擴めたり、但し此事たるや彼等の宗教を奉ずるに意ありて爲せしと謂んよりは事

宗教に無頓着ると政治上の利害を慮るとによりて爲せし者と謂ふべし。コンスタンタイン帝の宗教的生活に於る最も重大なる事件は紀元三百十二年に彼がマクセンチアスを伐んとて兵を進めつゝありし時に起れりユセビウス (Eusebius) の記録せし所に依て言んに、該暴君マクセンチアス魔術と妖法を以て決戰の準備を爲をりしかば、コンスタンタインも彼に當らんには神物の加護を得ざる可らずと信じ、何れの神に頼まんかと思索せしが、其父が當に利順を以て祝まれ、之に反して基督教の迫害者輩が遂に衰亡に歸せしを憶えしがば、偶像に事ふることを棄て、コンスタンチアスの神——唯一の主宰神——に祈れり、彼れ斯る思想に沈みをりしときに、亭午すぎで未だ幾程もあらし頃、空に煌々として輝やける十字架ありて、其上に是に由て勝てとの文字を載せたるを見たり、彼此異象を怪しみつゝ睡に沈みしに救世主忽然として彼に現はれ、前に天に輝やきたると同じき表號を御手に握り之を以て軍陣の旗號とせよと命じ、而して彼に戰勝の約束を垂れ給

へり、コンスタンタイン目醒めて後其夢裏の十字架を描しめ、此時よりして彼れの軍兵は贖主の御名の首字を十字架に組み合せたる徽章を帯べる旗の下に進むことを爲しぬ、コンスタンタイン勝利を全うして後馬に己れの像を建てたるが、其像の右手には十字架を持たしめ、其銘には所謂救ふ號なる者に由て勝利を得たることを書けり、

此の話は該帝が崩御の少し前に誓ひて宣られし所なりとユセビウスの公言せし者なるが、今日にありては之を字面ごほりに事實なりと言張る者は極めて鮮からん、想ふにコンスタンタインの如く教育せられし者にして争でか此話に見えたる如く全く基督教の何者たるを知らずあり得んや、是れ極めて疑がはしとす、但し此話が徹頭徹尾眞なるや否やは姑く措き、兎に角此時に帝の思想を唯一の眞神に轉せし事情何か有りしこと明かなり、而して此事情たるや、彼が基督教に左袒すること益々全くなるに随ひ、又彼が榮福の長く續くに随ひて、終に彼をして我は特別なる天佑を蒙むる者なり

と確信せしめたり、實に此確信は彼が行徑を通じて甚だ著きを見るなり、三百十二年の詔諭に由り、又三百十三年に於るミランの詔諭に由て、基督教徒が與へられし便益は、是れ容忍(信仰自由の寛曲)なりき、他の諸宗教の上に凌駕するの特恵には非りき、是等の勅詔は基督教を以て國教となせしに非ず、其功果に禮拜の自由を妨る一切の法律上の障礙を廢し、基督教徒を法律の保護を受べき一團體と公認せしに在りとす、余輩若コンスタンタインの行爲と立法とに照して彼が持信の進歩を發見せんと試みなば、彼が其次の年々の舉動の中に疑ふべく迷ふべき者多きを見出さん、彼は「上帝(Divinity)の事を曖昧模糊たる語を以て談せり、常ならば三百十四年の執行せらる可りし從來の遊戯を省けり、種々に基督教徒を寵遇し、彼等の社會に豊かに施こし、又許多の教會堂を建てたり、其子の教育を基督教徒たる有名の修辭家ラクタンテアス(Lactantius)に托せり、監督輩と多く交はり、屢々彼等を其食事及び旅行の伴侶となせり、教義上の爭論に干渉して其落着を助けたり、

「即ち西洋紀元三百十五年にはコンスタンティン帝(基督教を羅馬帝國の國教と爲したる人は基督教會教師の所有地に通常の租税を免じ磔殺十字架にかくる事を死刑に用ふることを廢し、猶太人にして基督教徒を騷がす者をば焚殺す可しと定めたり、同三百十九年に帝は又二つの法律を發して、私の獻祭及び占卜を禁じ、神官若くは卜者は人民の居宅に入て其術を行ふ可らずと命じ、三百二十一年には日曜日を一般に守ることを令せり、此日には農耕の事は許たれども、都邑に於ては商業を休み、裁判事務を止むる事となりぬ、而して異教徒たる兵卒までも此日には天帝に祈禱をさしげざるを得ざりき」か、帝は無妻無嗣なる人々に不利なる舊法律を悉く廢せり、又他の一勅詔によりて基督教會に死者の遺産を受る事を允されたり、此特權たるや教會の財政上に大なる便益を與へし者なり、

然はさりながら是等の立法及び行爲の中如何程までか該帝が基督教に心を傾けし證據と見做るべきや、彼の世間の勝負戯を廢せし如きは、只是れ

世俗の宗教を經んじたる者に過ぎずこやいはん、基督教徒に特權を與へ、又彼等の不能力を除きし法律は、只基督教社會を異教徒若くは猶太人と同等の地位に置きし而已、コンスタンティンが禁止せし私密の占卜は實は舊宗教の一部を爲す者に非ず、寧ろ是れ該の宗徒のために改革を圖れる人々が排除せんことを欲せしならん腐敗なりき、然のみならず是また政治上より見ても好ましき者には非りし也、日曜日を守るべき事を命せし法律に至りてすらも、基督教徒にとりてこそ特別なる神聖の意味を有したれ、コンスタンティン帝の自餘の臣民は之を以つて帝が其帝として有せる教皇の權を以て祝祭日の一を加へし者と見做せしならんも知るべからず、コンスタンティンが宗教に對せる政略を了解せんには、皇帝たるコンスタンティンと一箇人たるコンスタンティンを分別するを要す、皇帝としては彼れ四海浪靜かにして人民其堵に安んじ、政體堅固にして存續せんことを欲せり、故に此資格に於ては其人民の僻見に觸るを避け、萬人に同等の保

護を及ぼし、宗教上に思想の自由唯政治上の必要に由てのみ制限せられたるを許すこと、彼れの利益なりき、其一己の説(意見)に於ては彼れマクセンチアスを伐んとて進みつゝありし間に基督教を賛成するの決心を生じ、爾來漸々に進歩して、終に公然と福音を信する事を言あらはすに至りぬ、斯の如く彼が官職上の品質と一身上の品質とを別々に考へなば、恐らくは一見して前後撞着らしく見ゆる多くの點を最も善く理會するを得ん歟、即ち彼が生涯ボンチフエキス、マキシマス即ち大教皇の職——異教の聖制中に於る至高の地位——をたもちし事、彼が異教の儀式を已れの職掌に屬する者と見做して之が執行に與かりし事、又同じ年に發せし二つの勅令を以て、一方にては日曜日を嚴かに守ることを命じ、他方にては獸腸占(アラスピス)を例に依て行なはんことを命せし事——諸ろ斯の如き自爲相違恐らくは釋然氷解せん歟、

コンスタンタインとリシニアス相合して、マクセンチアスとマキシミン

を打亡ばせしや(三百十三年)忽ち彼等二人の間に争起りて、リシニアスの敗となり了りぬ(三百十四年)茲に改ためて羅馬帝國を二人の間に分割し、歐羅巴は、スレーヌを除くの外、悉くコンスタンタインの所領と定りしが、嫉妬猜疑再び燃えたちて復も戦争おこり、終にリシニアスの滅亡となりて終りにき、此時にあたりて兩帝ともに神助をもとめ、一は基督の旗の下に、他は異教の旗の下に、それぞれ兵を集め、各々天より來ると想像せし異象を頼みけるが、特別にもコンスタンタインの勝利は基督教徒の神の加護に歸せられたり、此時よりして異教の記號は彼れの貨幣上に跡を絶ちぬ、斯て彼は自ら眞宗教を弘むる神の機械なりと其詔書中に幾度か明言して憚からざりき、

コンスタンタイン帝今は滿地及び鐵山に在る基督教徒を悉く呼もごし、而して命じけらく、其信仰の故によりて官位を罷れし者どもは舊に復せらるべし、殉教者の財産は其相續人に還附すべし、相續人もし見あたらすば、之を教會に寄附すべしと、彼その一切の臣民に當て詔諭を發し、彼等に福音の

道を信せんことを勧めたり、但し是と同時にまた其道の傳播が唯温和の布教に由んことを望むとの旨を公言せり、然しながら帝は上流社會の改宗者には官職及び位階を與へ、下等の貧人には金錢を施して、改宗の舉を獎勵せり、此事たるや、ユセビウスが自ら公言せし如く、多分の偽善者と賈信者を生ぜりと云ふ、帝は各地に其處の住民を盡く容るゝに足る教會堂を建んことを命じ、異教の神々の像を立てることを禁じ、己れの彫像をも神殿内に立てることを許さざりき、一切の公獻祭は禁止せられ、舊宗教に戀々たる地方官の如きは此種の禮式を止めんことを命ぜられたり、但し其他の獻祭——國家の名を以てする儀式と異にして、神官輩が自ら執り行ひし所の者——は依然として打棄おかれたり、然しながらコンスタンタイン帝晩年に是等の獻祭をも禁ずる詔を出したりと見ゆ、其事縱實に有りしとすとも、是れ強て實行せられざりし也、

帝斯く基督教徒社會を高むることに力を盡せしと雖も、多數者の宗教に

ひかひては甚だしき反對を惹き起すらしきが如き攻撃をば絶えて加へざりき、彼其處置をして直ちに異教自身を攻撃する者たらしめず、異教の中に入こみし弊習を改革する者たるの觀をよそははしめき、彼は諸神の宮祠を敬して之をけがさず、祀る人々も無きが如き宮祠をば闕て、毀ち、其他をば基督教の教會に變じ、惟不道德なる儀式若くは虚妄の不思議奇蹟等を以て名ありし者をば破壊し去りぬ、

④ 羅馬府が羅馬帝國に對せる位置上に於る變動は、元々ダイオクリシヤン帝の政略あるひは方便に起因せし者なるが、コンスタンタイン帝は更に之を推廣めたり、彼れマクセンチアスを羅馬に亡せし後は、只二回該府を訪ひし而已、又其彼處にて受たる迎接待遇は彼をして満足の感を起さしむべき者にも非りき、茲に帝の名を以て稱へらるゝ一新都驚くべき速力を以てビザンチウムの跡に興れり、羅馬が異教の巢窟たるに引かへて、コンスタンチノープルは全く基督教の府たるべき者なりし、教會堂は各處に建られたり、諸神及

び傑士の像をギリシヤ及びアジアの諸の市府及び諸の殿堂より移し來りて新京街の街衢および公園を飾るに用ひ、傍ら之を以て基督教が舊宗教に勝てる誌表となせり、帝宮の最第一なる一室には聖史より取れる種々の畫を描きて莊嚴の美觀を添たりしが、其中には教主が十字架にかゝれる圖もありしと云ふ、羅馬府民の好物たる備圖グラデニールGradinierの觀物及び其他の變戲は決してコンスタンチノープルには許されざりき、但し舊都にありては是に對する人民の感情尙熾んなりしを以て、帝も敢て是には干渉をなさざりき、宗教の外行に於てはコンスタンタイン帝に勸めたりと謂べし、彼は貨幣及び賞牌の表に己れが神に禱る姿を圖せしめたり、彫像に於ても亦然り、彼は聖書を學び、又教會の禮拜に參列せり、彼は大なる熱心を以て復活祭の前夜を守れり、彼は其監督輩の極めて長き説教をも立て聽聞せり、彼は自ら説教をすらも書けり、而して拉句語より希臘語に翻譯せしめて後、之を其宮人の前に宣べたりと云ふ、

帝の母ヘレナ太皇后も帝の勳に由て新宗教を奉するに至り、其餘生は熱心と敬虔を以て著しかりき、三百二十六年は彼女は聖史中の重なる出來事によりて神聖となりたる種々の靈場を尋ねんと目的を以て聖地を訪へり、基督の聖墓の跡には莊嚴他に比び無き教會堂を建る事となしぬ、昔しハドリアン帝が建て其處を汚したる女神ヴェヌスVenusの宮をば毀ち、其下の土をば汚れたる者として掘すてたりと云ふ、此時三ツの十字架あらはれ出で、其傍に標帖ありて、上に教主の首の上に書たる銘を載せたりとぞ、キリストの墓地の外、其生れ給ひし處及び天に昇りたまひし處も亦——ヘレナの信心の證とし、又コンスタンタインが彼女をして無限の善根を植るしめたる證として——教會を建られたり、

コンスタンタイン帝の治世に二つの大爭論起れり、ドナトスDonatus爭論及びアリウスArius爭論即ち是なり、前者は西部に起りし者にて、教會の紀律につきての異論より發し、後者は東部より起りて、直に基督教の本體に

關す、帝は兩方に干渉せり、然れども其善良なる意向は必ずしも常に知識と健全なる判断の之に伴ふあらざりき、彼れ一方には無上の大權の握りをり一方には其奉ずる信仰の遺を詳かにせざりしを以て、動もすれば宗教上の考と政治上の考とを混同せんとせり、其臣民の間に平和を維持せんと望むは時としては彼をして宗教上の意見を無頓着に放棄せしめしが、或る時はまた宗教上の黨派の舉動を以て帝權を冒すの罪と做して之を罰したり、尼契亞會議に於て彼の有名なる尼契亞信經は議決せられ、基督教内の異端は排壓せられたりぬ、該會の散せし後、帝はアリウスと其信徒者に嚴罰を言わたして其決議を實行し、アリウスの書きたる物を廢するをすらも重罪となすに至りぬ、コンスタンタインは命を出して該黨をボルヒリアス宗徒(Porphyrians)と呼はしむ、是れ近頃異教の勇將として現はれたる有名なる論客の名より取し者にして、之を以てアリウス宗徒に基督教の敵なる汚名を蒙むらしめんとせし也、該會の三箇月後にニコメデアのエピセウス及びニ

ケアのセオグニス(彼等は信經には記名調印したれども放逐の詛詞には然かせざりし者なり)は或る新しき告罪に由て地方の大會にて罪に定められしかば、命じて之を審理せしめし、コンスタンタイン帝は彼等を追放の刑に處せり、

十九 尼契亞大會の招集及び決議

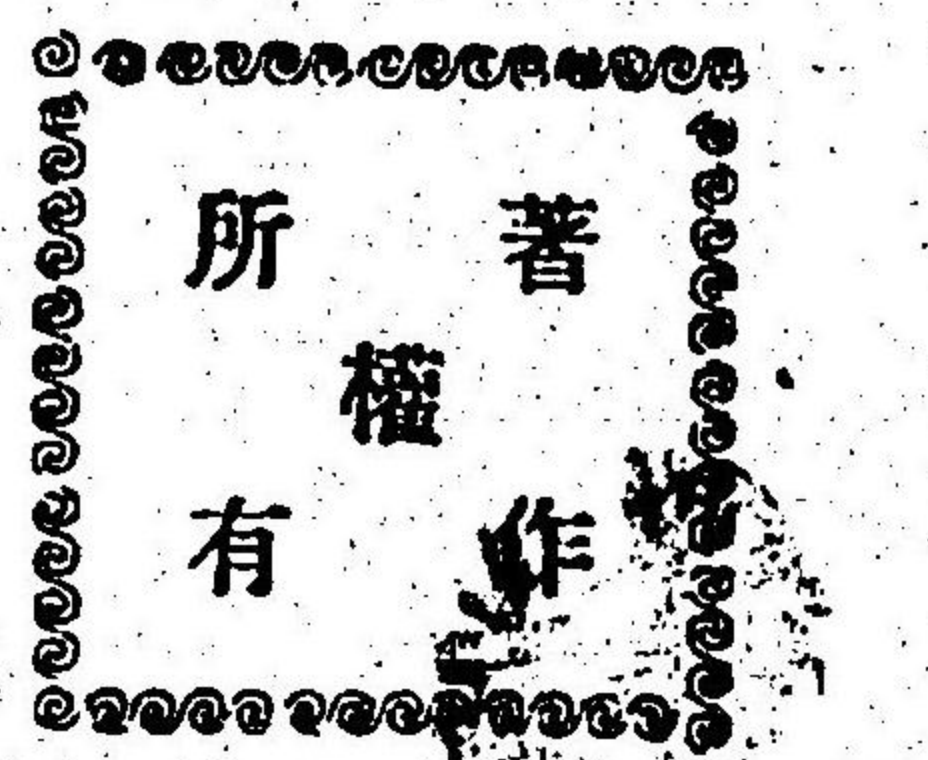
基督教内の紛争を落着せしめ、異説を排除すべく、全基督教國一統の大總會は小亞細の尼契亞に招集せり、但し該會議は羅馬の監督が召集せし者に非ず、コンスタンタイン帝の召集せし者なり、羅馬の監督は自身にても代理にても彼の議會に議長たらざりき、否な彼は之に出席たもせざりき、該會議の決議は羅馬の監督の認可を待つこと無りき、是皆羅馬の監督が未だ之を受ざる前に、コンスタンタイン帝の該會議自身との書翰を以て天下の諸教會に發布せられたり、(完)

「羅馬皇帝の物は羅馬皇帝に納め
天帝の物は天帝に納めよ」

附錄終

明治四拾五年三月
明治四拾五年三月
日印刷
日發行

定價金九拾錢

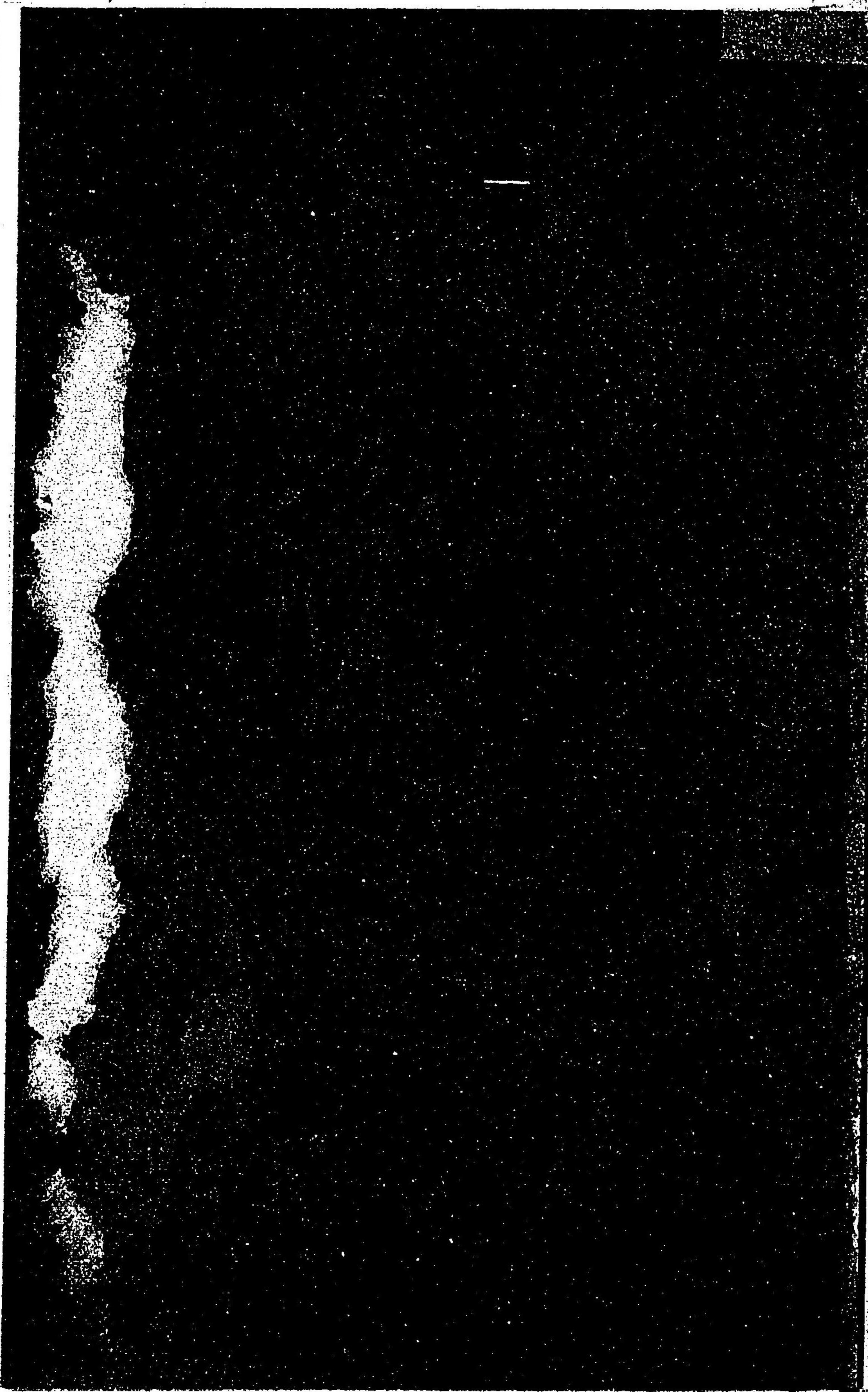


著作者	高橋五郎	東京市本郷區森川町壹番地
發行者	石田彦三郎	東京市神田區材木町二十七番地
發行者	大澤莊一郎	東京市本郷區湯島壹丁目貳番地
印刷所	合資 光社	電話下谷三三二五番

發行所
發賣所

東京市本郷區森川町壹番地
振替東京(五七八〇)番
東京市神田區表神保町拾番地
振替東京(七四二六)番

豐文館
武藏屋



中華民國三十三年五月十五日

外交部

外交部 總務司 秘書處

外交部 總務司 秘書處

外交部 總務司 秘書處

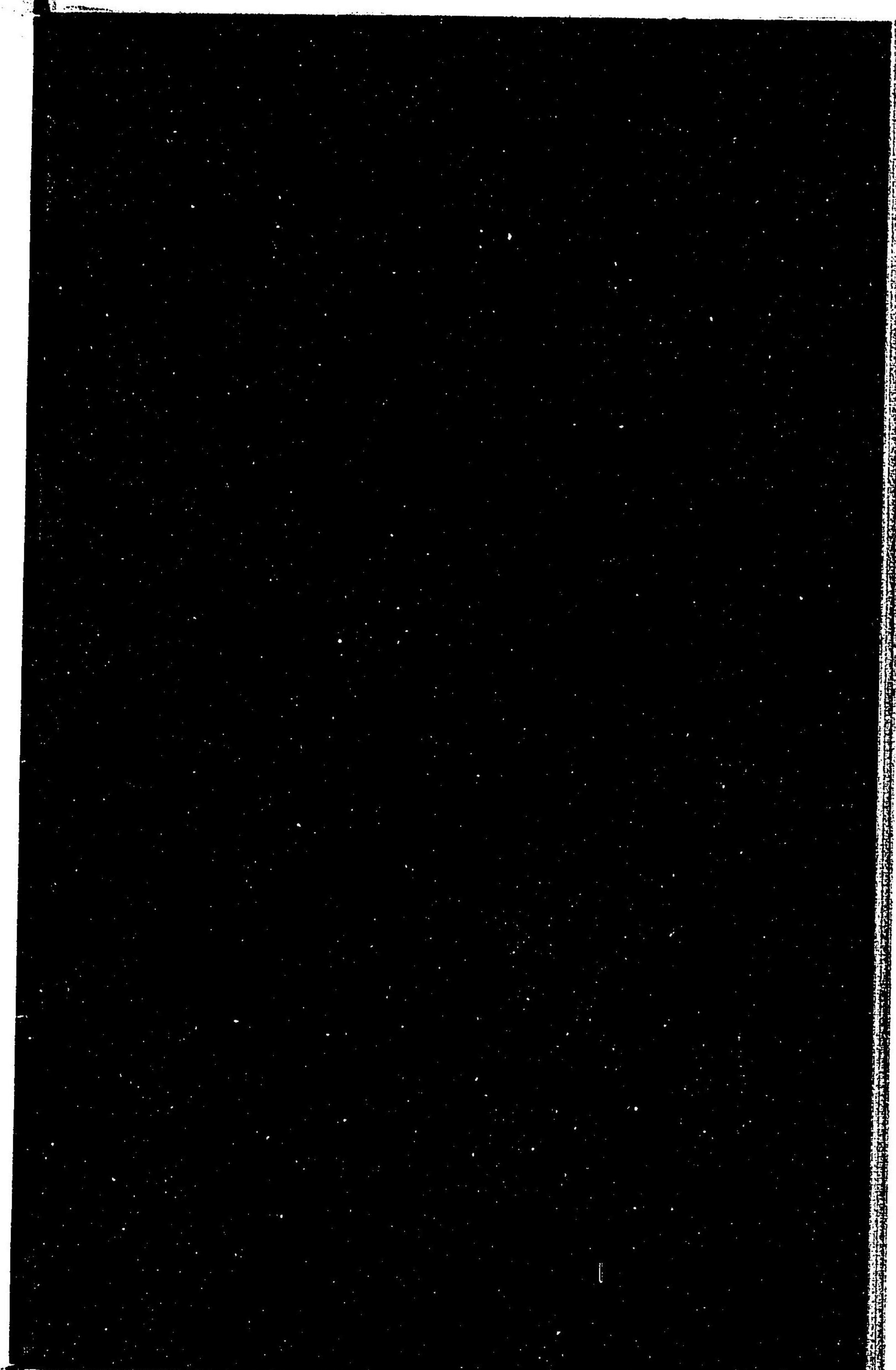
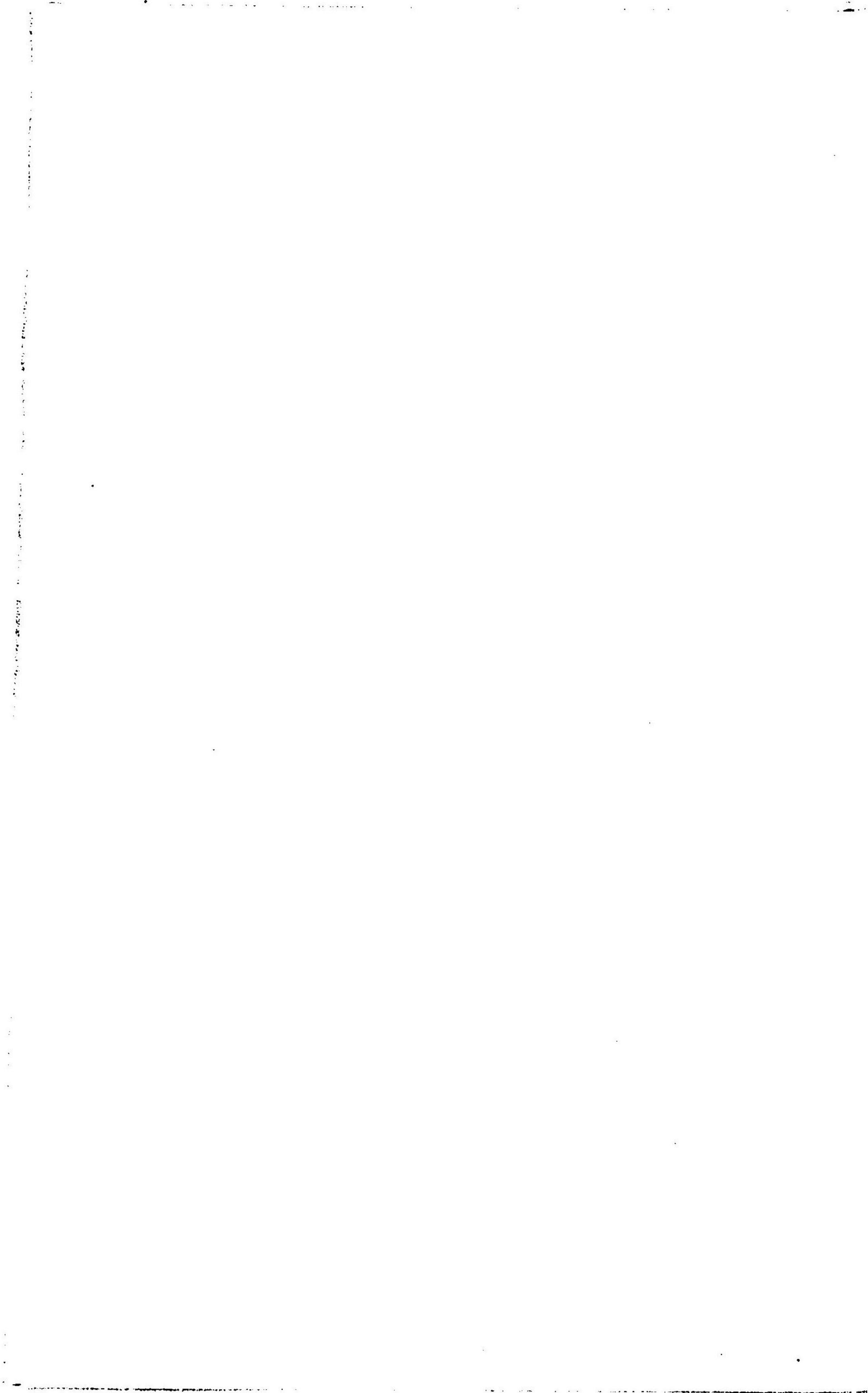
外交部 總務司 秘書處

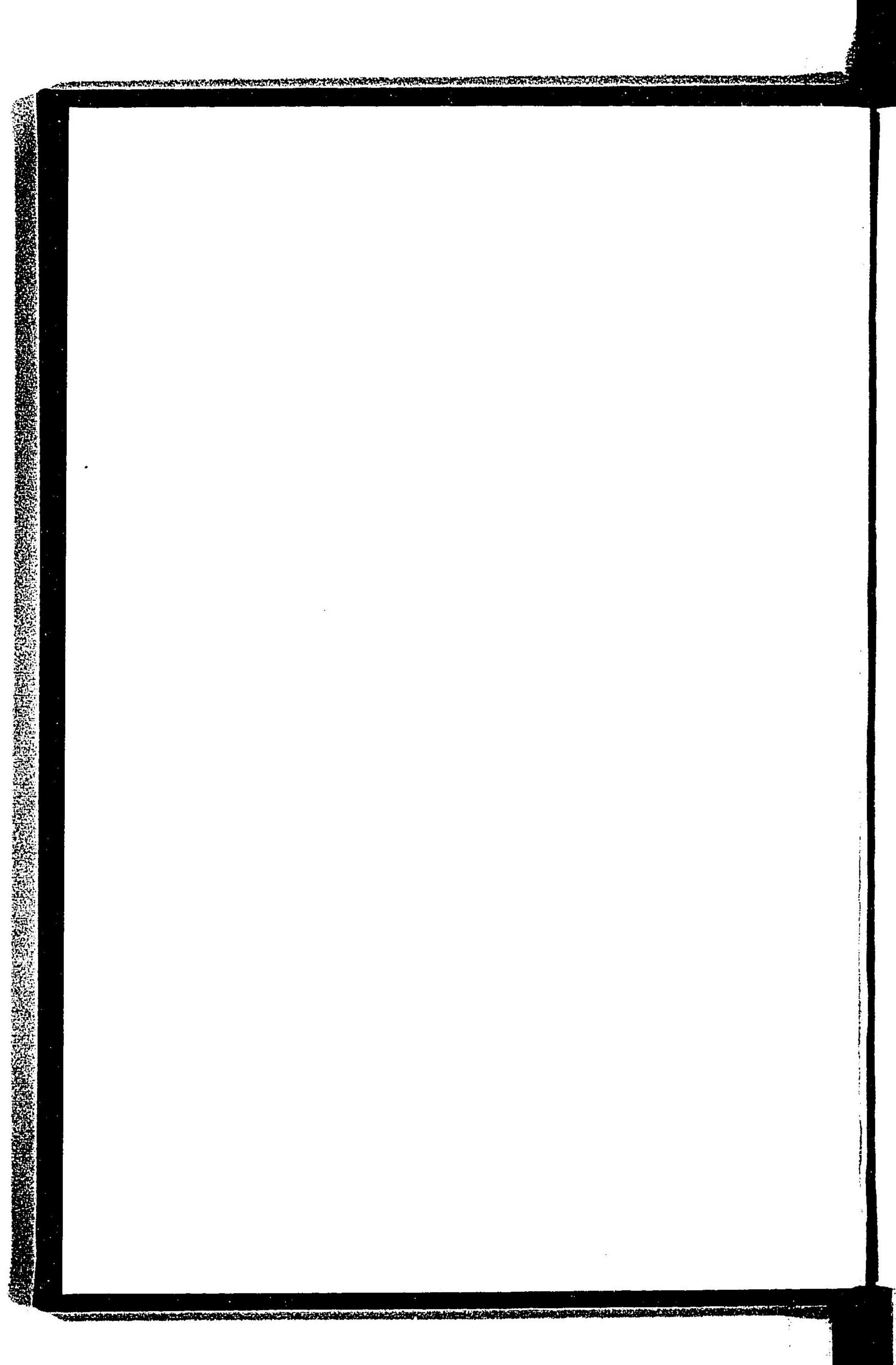
外交部 總務司 秘書處

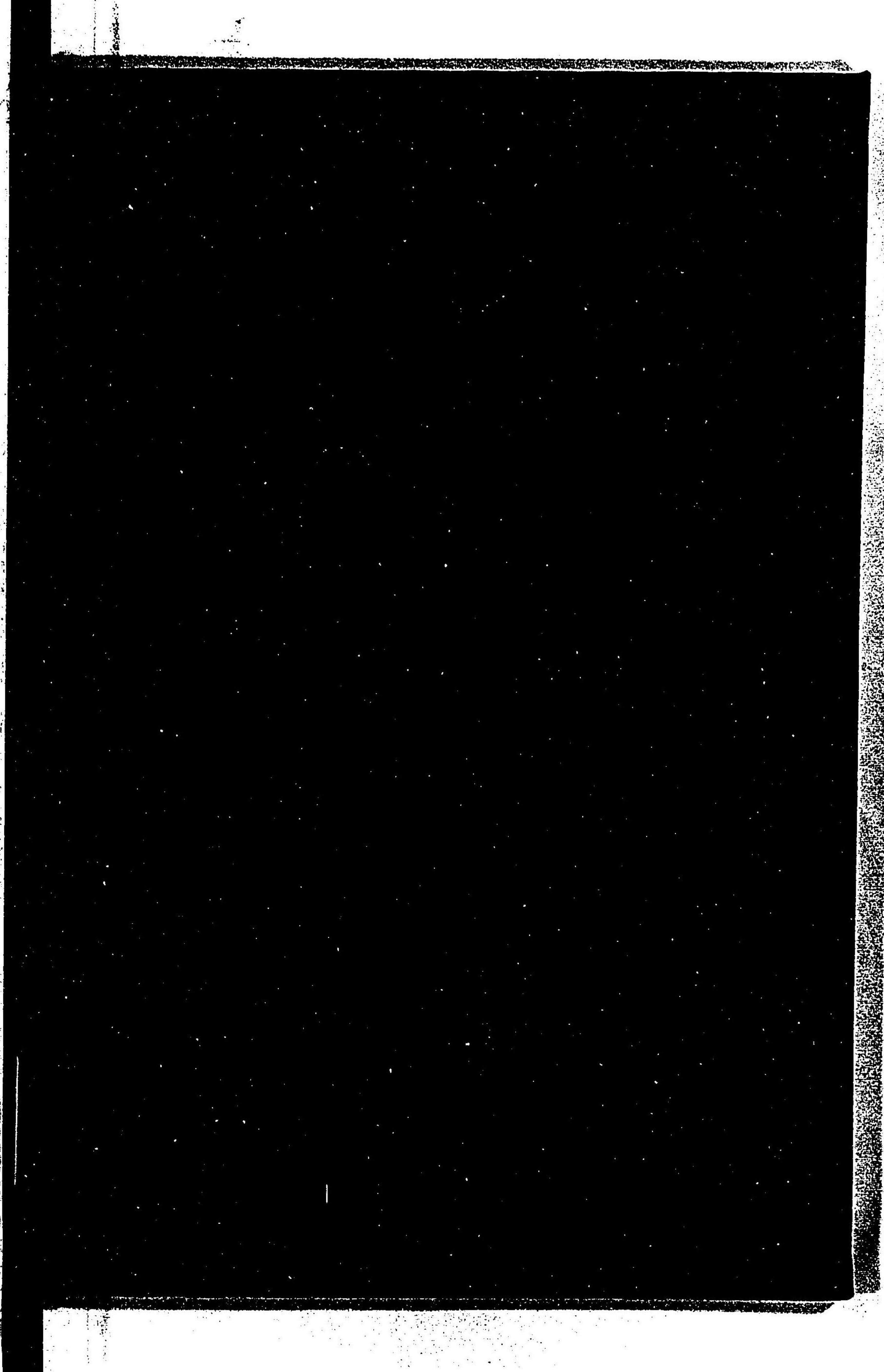
外交部 總務司 秘書處

外交部 總務司 秘書處

外交部 總務司 秘書處







324

280

M

020422-000-8

324-280

基督活毅論 附録，基督教会発達小史

高橋 五郎/著

M45

ABI-0231



